

山名

源矩豊

第8号

表紙裏
空白ページ

会誌「山名」第8号 目次

山名氏と沢庵和尚	山名 美和子	1
我がファミリーヒストリー	桃井 良直	9
拙著『日本史の変動と名言摘録』を脱稿して思うこと	山名 年浩	16
日帰りで出石への旅へ	飯田 麻紀子	20
山名伊豆守義範公について	宮田 靖国	23
西陣、東陣の発展をめざして	山名 靖英	40
西陣、そして東陣	細尾 真生	48
豊国の国入りと打揚駕籠を許された山名家	古川 哲男	55
健康寿命について	会員 何某	57
義理流―田渕氏の系譜	吉川 廣隆	61
豊臣期の山名禅高（豊国）	石井 伸宏	67

|| 特別寄稿 ||

山名氏と沢庵和尚

山形紀行 沢庵和尚の旧居跡「春雨庵」を尋ねて

作家 山名美和子（山名会会員）

山形盆地に若葉の匂うころであった。山形城址、
最上義光歴史館、県郷土館「文翔館」、駒姫の菩提を弔う専称寺などをめぐって取材を終え、
上山市を指してレンタカーのハンドルを握り、
羽州街道（国道13号）を南下する。

駒姫の哀れ

ついにながら専称寺にまつわる駒姫の悲劇を記
しておこう。山形城主・最上義光の末娘である。
戦国末期の1591年（天正19）、関白・豊臣
秀次が九戸政実の乱を平定するため陸奥へ下向。
その帰りに山形城に立ち寄った。接待にあたった
のが駒姫である。秀次は12歳の可憐な姫に心ひ

かれ、側室に出すよう義光に約束させた。3年後、
駒姫は京へ向かう。ところが翌年、秀次は叔父・
豊臣秀吉から謀反を疑われて切腹。秀次の正室や
側室、その子どもたち、あわせて38人は京の市
中を引き回され、三条河原で斬首された。わずか
16歳の駒姫も義光の助命嘆願むなく打ち首に
なった。まだ秀次にお目見えさえしていなかった
という。姫に同行し上京していた母も没したと伝
えられる。江戸時代になり、義光は旧領山形の藩
主として57万石の大名に取り立てられた。娘を
非業の死に追いやった悲しみはいかばかりであつ
たろう。専称寺の壮大さは義光の痛みの深さに思
えて、しばし合掌せずにはいられなかった。

山形から上山へ

さて、本題に戻ろう。車は山形市内から30分ほどで上山市中心部に入る。「かみのやま温泉駅」は山形駅から新幹線で9分、在来線でも12分、約12kmの距離でしかない。名湯で人気の上山温泉は15世紀半ば、旅の僧が発見したと伝えられている。

かみのやま温泉駅から歩いて7分ほど、標高198m、比高差20mの低丘陵上に上山城（別名月岡城）の天守がそびえる。1535年（天文4）、戦国武将の武衛氏^{ぶゑい}が月岡・天神森とよばれるこの地に城を築いた。江戸初期、上山藩主となった土岐氏^{とぎ}が整備拡張、壮麗な城郭は「羽州の名城」として知れわたる。

土岐氏が他国へ国替えになったあと、城主はめまぐるしく変わり城は衰退。明治の廃城令で取り壊しとなる。1982年（昭和57）、コンクリート造りの3層4階、高さ31.7mの天守が再建された。内部は郷土資料館となっており、最上

階からは市内や雄大な蔵王連峰が一望できる。

静かにたたずむ「春雨庵」

郷土資料館で大名の参勤交代や出羽三山巡りの旅人^{かみやまじゅく}でにぎわう近世の上山宿の様子、蔵王の自然と蔵王修験^{しゅげん}の世界などの展示をたどる筆者の眼に、「澤庵宗彭^{たくあんそうほう}」の文字が飛び込んだ。あの「沢庵漬^{たくあんづけ}」を考案したという沢庵和尚である。そうだった、和尚は紫衣事件で流罪になったはず。その住まい「春雨庵^{はるさめあん}」が、まさにこの城下に築かれているのだ。これは尋ねなければならない。天守を下り、まずは城址の月岡公園で足湯をつかい、散策の英気を養う。城下には藩政期そのままの茅葺^{かや}きの武家屋敷が何棟か現存する。中級武士の住まいだったというが、屋内から



春雨庵の鄙びた表門（筆者撮影）



春雨庵と沢庵愛用の井戸（筆者撮影）



は子どものはしやぐ声なども聞こえて、今も居住者がいるようだ。沢庵和尚の旧居跡「春雨庵」はすぐだった。「春雨庵」の扁額が掲げられた桧皮葺門、土塀、竹垣、手入れされた庭木、さりげなく繁る野の花、その奥の小さな庵は、俗世と隔たる清らかさでたたずむ。

1629年（寛永6）、幕府の命令で上山へ配流された和尚を、城主・土岐頼行は庵を寄進して手厚く庇護。和尚はこの庵を氣に入って「春雨庵」と名付けた。現在の春雨庵は、1953年（昭和28）県史跡に指定された庵の遺構に、1955年（昭和30）原型通りに復元されたもの

である。

室内のひんやりとした畳敷きに、明障子を透かして木漏れ日が淡く忍び込む。座敷奥の壇上には、胸まで伸びる顎髭をたくわえた法衣の沢庵和尚の尊像が鎮座する。静かに向き合えば、穏やかな法話が耳をかすめて聞こえてきそう。庵のかたわらには和尚が日々愛用した井戸「山の井の水」が残っている。

沢庵和尚の生い立ち

沢庵和尚は1573年（天正元）、秋庭能登守綱典の二男として但馬国出石（豊岡市出石町）に生まれた。父・綱典は、但馬国守護・出石城主の山名祐豊の重臣であった。祐豊は持豊（宗全）の5代あとの山名氏総領家である。1542年（天文11）に生野（兵庫県朝来市）で生野銀山が発見され祐豊は銀山経営を大規模に推進、日本有数の銀山となっていく。その管轄権をわが物にしようとする織田信長は但馬に侵攻、配下の豊臣秀吉に攻められて山名家は滅亡し、秋庭綱典は浪人と



庵内に祀られる沢庵和尚（筆者撮影）

なる。8歳（数え年）だった沢庵は10歳で出家。14歳で出石藩主菩提所の宗鏡寺に入寺。6年後、京都大徳寺住持である春屋宗園の弟子・薫甫宗忠が宗鏡寺に住職として入寺し、大徳寺との縁が結ばれる。のち宗忠に従って大徳寺に入った。さらに宗忠に同行して石田三成の居城である近江の佐和山城内の寺におもむく。関ヶ原の戦いで三成が敗北して佐和山城が陥落すると、宗忠とともに春屋のもとへと脱出。刑死した三成の遺骸を引き取って手厚く弔った。

32歳、ついに悟りに至ったとして「沢庵」の法号を授かる。37歳のとき勅命で大徳寺第154世住持の地位を得た。だが名利を求めない沢庵は「一介の僧に徹すべし」と3日間で大徳寺を去ってしまう。和泉国堺に出て高僧に師事。1620年（元和

6）、48歳のとき出石に帰り、かつて修行の日々を送った宗鏡寺に「投淵軒」という庵を結んで隠棲した。宗鏡寺は後世、「沢庵寺」と呼ばれるようになる。出石城下には今も、江戸期の重厚な家老屋敷が残っている。守護大名・山名祐豊の重臣であった秋庭家の屋敷も、沢庵の幼時には堂々としたものであったことだろう。

紫衣事件とは

紫衣とは紫色の法衣や袈裟のこと。古くから宗派を問わず徳の高い僧や尼僧に朝廷から下賜された。僧・尼僧の尊さをあらわし、朝廷の収入源でもあった。江戸時代になると、幕府は「寺院法度」、「禁中並公家諸法度」で寺社や朝廷を厳しく統制。朝廷がみだりに紫衣や上人号を授けることを禁じた。

1627年（寛永4）、後水尾天皇と幕府が対立する「紫衣事件」が起こった。天皇は幕府に断りなく、慣例通り大徳寺や妙心寺の高僧十数人に紫衣着用の勅許を与えたのである。幕府はこれを

法度違反とみなして無効を宣言、紫衣の取り上げを命じる。朝廷はこれに反発、意を同じくした沢庵は京にのぼり、妙心寺の高僧らとともに反対運動を行い、幕府の統制を強く批難する抗弁書をみずから書いて提出した。1629年（寛永6）、幕府の命令に背いた罪で沢庵は出羽国上山へ、ほかの僧は陸奥や津軽へ流罪となる。このとき沢庵は57歳であった。もともと朝廷の官職のひとつにすぎない征夷大將軍とその幕府が、天皇よりも上に立ったことを意味する事件であった。

その後の沢庵和尚

沢庵和尚は春雨庵で平穩に3年間の流人生活を送る。上山藩の初代藩主・土岐頼行が上山藩に入部したのは沢庵が配流される前年のこと。22歳の若い藩主は、権力に屈せず、名利を求めず、身に受けた苦難をもともしない和尚を崇敬し、帰依して教えを仰ぐ。父祖に孝養をつくすように真心で接したと伝えられる。頼行は沢庵の教示を求めつつ、城や城下町、出羽街道の難所の整備、検

地、水路の新設、寺社創建、温泉の利用拡大など藩政の基礎を固め、領民から名君と慕われたという。

1632年（寛永9）、沢庵が60歳の年に大御所・徳川秀忠ひでただが没し、大赦が行なわれた。沢庵ら紫衣事件に連座した僧らは、徳川家康以来、將軍家のブレンやぎゅうむねのりだった天海僧正てんかいそうじょう、將軍家の兵法指南役の柳生宗矩らの尽力により罪を許される。天海や宗矩は沢庵の枯淡の禅風、気骨ある生き方を敬ったのではあるが、一方、朝廷と幕府の対立を修復しようとして赦免を策したとされる。

しかし沢庵和尚は京に帰ることは許されず江戸に留め置かれ、寺や幕臣の屋敷に身を寄せる。紫衣事件の首謀者がふたたび朝廷と結ぶことを用心してのことだという。2年後、いったん大徳寺に戻っていた沢庵は、上洛した三代將軍家光に天海や宗矩の勧めで拝謁。家光は沢庵に帰依の念を深めたという。

沢庵は出石に帰ったが、江戸に赴くよう命じられ、1639年（寛永16）、67歳のとき江戸



品川・東海寺（筆者撮影）

に戻る。家光は沢庵のために品川に屋敷を建て、4万坪の土地に東海寺を建立し、沢庵を初代住職に迎える。かたくなに断り続けた沢庵だったが、柳生宗矩に説得されて引き受けた。

野僧を捨て、権力者である家光のそば近く仕える身を、みずからあざけったと伝えられるが、この立場をおおいに生かしていく。紫衣事件のきっかけになった大徳寺・妙心寺の僧衣着用などの寺法を、もとに戻すことを家光が認めた。両寺は幕府から奪い取られた紫衣を取り戻し、紫衣事件以後「寺院法度」にがんじがらめになり衰退していた法灯を旧に復して守りつなげることを可能にしたのである。

沢庵和尚は江戸で没した。「墓碑を建ててはならぬ」と遺誡を残し、辞世の偈（悟りの詩句）を

求められると「夢」の一字を記して筆を投げ、息を引き取ったという。

享年74。出石町宗鏡寺、品川区東海寺に墓所がある。

後水尾天皇の中宮・東福門院和子

最後に、日本文化に大きな遺産をのこした中宮・東福門院和子のエピソードを加えておこう。幕府に激しく抵抗した後水尾天皇の中宮で、女帝・明正天皇の生母である。

2代将軍・徳川秀忠と御台所・お江（崇源院）

の5女・和子は、わずか5歳で後水尾天皇への入内が決まった。その後、大坂の陣、家康の外界、後陽成院の崩御、さらには天皇の寵愛する女官が皇子・皇女を産んだことが判明し延期が続いた。

14歳になって、幕府による莫大な持参金・持参品とともに女御として入内。第一皇女・興子

内親王の誕生により中宮に立てられた。2皇子、5皇女を産んだが皇子は早世してしまう。

「紫衣事件」が起こると天皇は幕府に抵抗して

譲位。興子内親王は7歳で第109代・明正天皇として即位した。和子は東福門院の女院号をたまわる。幕府に強く抵抗する天皇であったが、一方、禁裏の奥深くに嫁いだ將軍の娘・和子の肉声は伝わっていない。だが幕府と皇室をつなぐようと務め、多くの華麗な文化遺産をはぐくんだ。

修学院離宮は和子の要請で父・秀忠の遺金を用い、建築費の大半を幕府が負担して造営された。

東山の養源院は、伯母・淀殿が父母である浅井長政とお市の菩提を弔って建立した寺だが、淀殿亡き後は母のお江が守り、お江なきあとは和子が兄・家光に頼んで庇護した。元禄文化の担い手となる尾形光琳・乾山兄弟の実家である呉服商「雁金屋」を重用し、「寛文小袖」と呼ばれる華麗な衣装を製作させる。桂・袴を装う宮中に、武家の衣装である小袖を持ち込んだのは和子であった。現代のような形の和服をデザインし、肩から袖に流れるように刺繍・鹿の子絞り・辻が花染め・摺箔をほどこした華麗な衣装を創作していく。当時、江戸城大奥の上臈が着る小袖の値段は1着につき

銀3000匁（35万〜60万円）までと決められていたが、御所の小袖は銀500匁（60万〜100万円）。毎月のように仕立てて女官に下賜したので、衣装代は年に銀94貫581匁（1億5000万〜2億円）にものぼったという。

和子は茶道を好み、千利休の孫・宗旦を御所に招き、現代の「茶事」の作法を編み出した。茶道具の水差などは京焼の野々村仁清に注文。和子が愛用した長耳付水差は三井記念美術館（東京都中央区）に現存する。

手先の器用な和子は、今も羽子板などに見られる「押絵」の創作を得意とした。現在に伝わる最古の押絵は和子のつくったものだという。茶道の千家に多く下賜され、拝領した京の文化人のステイタス・シンボルとなった。ひな人形の御所飾り（お内裏さま・三人官女などの並ぶ段飾り）も和子の発案という。

後水尾天皇は文化的センスにすぐれ、幕府の進める武家文化に対抗して古典文芸・文化の興隆をもたらししたが、和子の美意識もそれに勝るとも劣

らない。強気な後水尾天皇と幕府の双方の面目を立て、さぞかし気苦労の多い一生であつたろうと思われるが、当代一のアーティストの感性で美術品や作法を考案して現代に伝え、72歳で没した。幕府の財に庇護され、和子によって京に展開した芸術の結晶は「寛永文化」と称され、やがて、中世の伝統を引き継ぐ「元禄文化」へと花ひらいていく。

○略歴
山名美和子氏 プロフィール

東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。

東京都・埼玉県の公立学校教員を経る。

『梅花二輪』で第19回歴史文学賞入賞。

十文字学園女子大学地域連携事業外部評価委員を経る。

放送大学大宮校 対面授業非常勤講師を経る。

○著書

『梅花二輪』、『光る海へ』、『ういろいろ物語―子相伝で受け継がれた、霊薬の秘密と伝統の軌跡』、『恋する日本史 やまとなでしこ物語』（新人物往来社）

『戦国姫物語 城を支えた女たち』、『甲斐姫物語』（鳳書院）

『乙女（ヒロイン）でたどる日本史』（大和書房）

『恋する日本史 やまとなでしこ物語』、『真田一族と幸村の城』（KADOKAWA）

『直虎の城』（時事通信出版局）

『列島縦断「幻の名城」を訪ねて』（集英社）

『本能寺前夜 明智光秀の苦悩と真実』（SBK

リエイティブ）

○共同執筆

『週刊 名城をゆく』（小学館）

『週刊 名将の決断』（朝日新聞出版）

ほか新人物往来社歴史読本、G a k k e n M o o

k、洋泉社MOOK、など多数

○現在

日本文藝家協会会員、日本ペンクラブ会報委員会委員、鳩山町文化財保護委員、町史編纂委員、埼玉大学経営協議会委員、成田山新勝寺『智光』小中学生作文コンクール選考委員、埼玉県「埼玉文芸賞」小説随筆部門選考委員、朝日カルチャーセンター講師等

我がファミリーヒストリー

桃井良直（桃井家当主）

貴兄（山名年浩様）のホームページを拝見し、初めてお電話を差し上げたのが、7年前の2015年7月8日でした。本日、2度目のお電話をさせて頂きましたのは、山名様の親戚の桃井静子（私の父方の祖母）の夫・桃井直幹（陸軍軍医中将）に関する貴重な資料（写真）を発見したからです。

祖父・桃井直幹（陸軍軍医中将）とラストエンペラー溥儀との2ショット写真（非公開）。昭和15年に溥儀が2回目の来日をした際に、陸軍軍医学校での極秘写真です。祖父はこの時、陸軍軍医少将兼陸軍軍医学校校長で、この直後に、陸軍軍医中将（軍医のトップ）に昇進し、終戦直後には、勲一等瑞宝章を授与されました。

現在、世界中がコロナ感染で騒然としておりますが、我が国の国立感染症研究所の前身（戦前・戦中）は、陸軍軍医学校であり、そのトップは祖父で

した。戦いで亡くなる兵士よりも、マラリア等で亡くなる兵士の方が遥かに多かった時代に、祖父はその感染症と最前線で戦っておりました。御前会議に出席した祖父を誇りに思います。

祖父は、中国戦線においては、昭和天皇の弟君の三笠宮殿下の主治医でもあり、父・桃井直達は、殿下の御推薦

で、筑摩書房から著書「ホメロスなくしてトロヤなし」を出版させて頂きました。シュリーマンがトロイの遺跡を発掘する壮大なる



祖父・桃井直幹と溥儀（右）
（桃井良直所蔵）

歴史ロマンの物語（実話）ですが、古代オリエント文明の研究者として著名であられる殿下のお力があってこそ、初めて、この書籍は世に出ることが出来ました。

ラストエンペラー溥儀と祖父との2ショット写真は、防衛省の方でも誰も見た事もない秘蔵写真です。で、私が著書を出版する際には、この写真を先ず巻頭に登場させ、「最愛の祖父母・桃井直幹静子に捧ぐ」と明記し、桃井家に関するファミリー・ヒストリーを紹介するつもりでおります。

また、面白いエピソードとして、幼き頃、祖父から聞いた話を御紹介します。中華民国・南京政府のトップ・汪兆銘が、演説中に暴漢から狙撃され3発の銃弾を受けたのですが、名古屋大学病院にて、その銃弾の摘出手術を指揮したのは祖父です。

小説家の上坂冬子さんが著書「我は苦難の道を行く―汪兆銘の真実」（文春文庫）の中で、「その銃弾を摘出したのは、内科医の軍医・桃井直幹氏ではないのでは？」と書かれていたのは誤りです。

祖父は、部下の外科医を指揮し、見事にその銃弾を摘出し、汪兆銘夫人から非常に感謝されました。南京政府が海外のVIPに与える一級同光勲章は、勲一等等ともに、桃井家筆頭の跡取りの私が、現在、大切に保管しております。ただ残念なのは、幼き日に祖父から見せてもらった汪兆銘のレントゲン写真とロングピースの缶に入った3発の銃弾が行方不明になってしまったことです。

祖父はまだ小学生の私に「人生は長い、浮き沈みも激しいので、失敗しても、気にすることないからね、良直君！ やり直しは何度でもきくから」と、印象深い言葉を残しました。

最近、その意味が良くわかりました。祖父の郷里の和歌山市から取り寄せた軍歴証明書に、気になった記録があり、長年私は不思議に思っておりました。勲一等をもらった祖父が、何と2階級も降格していたのです。そこで、慶応義塾大学の後輩でもある歴史家の磯田道史先生（NHK「英雄たちの選択」の司会者。映画「武士の家計簿」原作者。NHK大河ドラマの時代考証でも有名）に相談し、調査を依頼しました。

調査の結果、祖父の降格の理由はあつけないものでした。当時、陸軍軍医学校のぼや騒ぎがあり、校長として部下の責任を取らされて、2階級降格になつていたので。でも、上司の心優しき畑俊六陸軍大将の温情で、すぐに、元の階級に復帰することが出来ました。祖父は豪放磊落で、実に愉快な人でした。しかし、普段は、自慢話や戦前・戦中の話はほとんど話しませんでした。

ただ、強力に私の記憶にあるのは、私が小学校5年生（10才）頃に、祖父が、豪快に笑いながら、「良直君、おじいちゃんはね、酒を飲み飲み勲一等！（を取った）」「おじいちゃんの誕生日は、明仁皇太子様（昭和天皇の御子息・現在の上皇様）とイエスキリストの誕生日の間の12月24日に生まれたんだからね。大物になるべくして生まれたんだよ」と日本酒を豪快に飲みほしながら、語った口癖が、忘れられません！実に楽しそうでした（爆笑）。普段は、無口で、にこにこ笑うだけのおじいちゃんなのに、ここぞという時には、思いきり笑わせてくれます。

祖父が亡くなった時、親戚一同が静岡県伊東市伊

豆高原の家に、お通夜の為に、全国から集まりましたが、ここでも、桃井家の強烈な笑い話があります。普段、愉快的肝っ玉ばあちゃんの祖母だけが、珍しく、めそめそしていたのですが、親戚一同は久々に会った嬉しさからか、飲めや歌えやの大宴会で、和歌山弁で騒ぎまくっていました。正にどんちゃん騒ぎでした。

高校3年になる直前の春休みの僕は、あつけないながらも、これこそが、「桃井家の家風」なのだと感じ、誇らしく思えました。「悲しい時こそ、明るく祖父を送るゝこれこそが桃井直幹にふさわしい」と全員が笑顔で、祖父の想い出話で盛り上がっていました。

その祖父は、現在、紀州徳川家の霊廟のある和歌山市の報恩寺（日蓮宗本山・歴代藩主正室の菩提寺）に眠っています。

私の名前「桃井良直」の命名は祖父がしてくれました。父・桃井直達が東大工学部応用化学科を首席で卒業した天才肌の学者だったのですが、世間知らずのおぼっちゃまだったので、私には平凡で良いか

ら常識人で素直に育ってほしいということで、優・良・可の真ん中の良と、代々男の子につける直の字から良直に決めてくれました。

最後に、桃井静子から聞いた話を紹介します。祖母は、安倍晋三元総理の祖母の岸良子さんと女学校（実践女子大の前身）の親友でした。

それで、岸信介総理と良子夫人は、祖父母が暮らす静岡県伊東市の家にたびたび御殿場の豪邸からSPに警護され遊びに來られました。

そこで、私と1才年下の安倍晋三さんを、英国に留学させ、厳しい寄宿舎生活をさせようと親友同士で盛り上がっていたのです。孫の迷惑をかえりみず……困ったのは僕と安倍さんです（笑）。ただ



祖母の親友・岸良子さん
（岸信介夫人・左端）

（岸家所蔵写真）

逃げ回りました
（爆笑）。

ちなみに、この伊東の家（伊東市岡字瓶山）は、徳川家の最後の将軍・徳川慶喜公の七女



祖母・桃井静子
（桃井良直所蔵）

の先生です。

18才で、30才の祖父と結婚した祖母は、実に褒め上手の達人で、夫に勲一等をとらせたのも、息子2人を東大に行かせたのも、祖母のヨイシヨのおかげです（爆笑）。ちなみに、伯父・桃井宏直は、東大医学部卒・東大講師から東京医科歯科大学教授になりました。

私は、昭和51年に慶應義塾大学法学部法律学科を卒業し、当時（現在も）、リクルートの「大学生が選ぶ就職先人気企業ランキング（文系）」1位の伊藤忠商事に、不況のまった中で入社することが出来ました。これも、ひとえに、「祖父母の苦しい時にこそ明るく生きる」という〈強運のDNA〉

の浪子様の別荘で、戦後、公職追放にあった祖父母と浪子様はこの家で暮らししました。その御縁で浪子様の息子さん（松平さん）が私の油絵

のおかげだと心から感謝しております。

ちなみに、この時、住友商事の会長は、母方の祖母・水野千枝子（旧姓守屋）の妹を妻にした津田久でした。私の母・桃井敬子（旧姓・水野）から聞いた話では、東大の苦学生だった津田のおじさんが祖母の妹と結婚したいと言った時に、私の曾祖父・守屋孝蔵（京都市弁護士協会会長・公安委員長）を説得したのは祖母・水野千枝子でした。

その後、津田久は、住友グループ中興の祖といわれるまでに出世しました。「私の住友昭和史」（津田久編著・東洋経済）参照。また、祖母水野千枝子の夫・水野一郎（東大経済学部卒・安田銀行）の父である水野敏之丞（私の曾祖父・久留米出身。水野家は代々、久留米藩家老の家柄）は、京都帝国大学の初代理学部長で、京都帝国大学理科大学の初代学長となり、日本で初めてレントゲン撮影に成功したことで知られています。父方（桃井家）・母方（水野家・守屋家）のファミリーヒストリーを知れば知るほど、苦労を重ねた御先祖様のおかげで、現在の私が存在するという意味を痛感し、定年退職後の今、こうして、岩田（山名）年浩様とも、ゆっくりお話

し出来る機会が増えたことに、心から感謝しております。

2022年（令和4年）1月18日火曜 記

桃井良直

付記 山名年浩

今回、玉稿を頂いた、桃井良直氏は大戦中の軍医の最高位におられた桃井直幹氏の孫に当たられる方です。

桃井氏は清和源氏の中で足利氏のなぐれに入り有力な一族として今日まで来られています。

格段の位置にあられた桃井氏は直幹氏の妹の井畑叔子様が私の従姉（竹内郁久子）の夫の竹内隆のご母堂であった関係があります。この竹内家も代々医師であり、その関係があったものと推察されます。後継者のない京都市内の竹内家を継続するために竹内郁久子も岩田家から養

女に入りました。かくして、桃井―井畑―竹内―岩田―山名が連なっております。なお、岩田家は京都で珫瑯釉薬を開発し特許を取り、日本陸軍の水筒の釉の生産を任されておりました。備後の山名も後継の心配から岩田家から私が入ったといういきさつがございます。一言付け加えました。

筆者紹介

ゼロ戦のエースパイロット原田要先生（当時9才）に、元ソニー社長安藤国威氏を御紹介した時の写真です。

原田さんは、真珠湾攻撃にも参戦し、最近まで生き残った数少ない方で、映画「永遠の0」のモデルの一人です。

戦後は、長野で幼稚園を経営し、戦争反対の姿勢を貫き、平和を訴える活動に亡くなるまで熱心に尽力されました。

この写真の3ヶ月前の6月には、フジテレビの

筆者近影



（左）筆者桃井良直、（中）原田要氏、（右）安藤国威氏
（2015年9月14日撮影 桃井良直所蔵）

終戦70周年特番で、NHK大河「鎌倉殿の13人」の主役の俳優小栗旬さんが、原田さんの長野の御自宅を訪問しています。

私は原田要氏著「老兵の回想」を読んで感銘を

受け、長野の御自宅まで会いに行きました。

初対面で意気投合し、その後、何回もお会いし、8月11日の99才のお誕生日会の司会も任されるようになり、「最後の親友」と色紙に書かれる間柄になりました。

尚、この模様はドキュメンタリー映画にもなり、NHK国際放送で全世界に配信されました。

この翌月の9月に、私のビジネスパートナーである元ソニー社長の安藤国威さんを、長野までお連れし、原田さんを御紹介し、思い出深い記念すべき日となりました。

安藤さんは、パソコンのVAIOやソニー生命生みの親で、あのアップルの創業者スティーブジョブズが、日本人では、ソニー創業者の盛田氏と並んで親しくしていた経済界の大物ですが、原田さんも安藤さんも、実に気さくなキャラクターで、私は毎回お会いするのが楽しみでした。

今回の山名一族会でも山名（岩田）年浩様や吉

川廣隆様ともお知り合いになれて、山名宗全公のお話が聴けるのが、何よりも楽しみです。

桃井家当主 桃井良直

拙著『日本史の変動と名言摘録』を脱稿して思うこと

山名年浩（山名会相談役）

歴史研究の面白さとは新たな史実が明らかにな
った時にある。歴史のダイナミックな変化を背景
にした人間の行動はその言葉としても後世に残さ
れてくる。時代背景の中での人々の心の動きはそ
の人物をみる上で大切である。過去の歴史的な文
献を見ると、ほとんどは時代背景と人物の言葉が
別々に取り上げられてきた。両者の関係を取り上
げた研究は少なかった。本書の特徴はこの視点で
日本の歴史を取り上げたことにある。特に、歴史
変化の根底にある経済の変化から土地所有者層の
変化を時代背景として取り上げた。名言はその人
物の平穩・前進・飛躍の局面や後退・敗北や破滅
の局面と様々に出てくるが、それなりに大切な言
葉ととらえた。

筆者は経済学の著書を単著で10冊、共同また

は分担執筆で6冊、翻訳書6冊、論文96編（内
レフェリー制の論集へは30編）等を作成してき
た。今回はライフ・ワークとして、歴史の著述を
世に出すことにした。

一族の顕彰会が発行する冊子の目的はおのずと、
その一族の過去からの歩みを称えることが主題と
なって当然であろう。ところが、歴史を含む研究
の作業は当初から打ち立てた目的に収斂するよう
な意図ある作業は客観性に欠けることになり、研
究とはなじみにくい。

本書『日本史の変動と名言摘録』は単に名言を
羅列したものではなく、名言を生み出した社会状
況を考察し、その時代背景との関連で歴史上の人
物の言葉を取り上げている。このことについては、
P400～401に図を使って説明しておいた。

また、人物を取り上げることを中心に、日本史の注目すべき13点をP3〜4にまとめておいた。戦後の歴史学は戦前期の反省もあり、人物で歴史を綴ることにアレルギーがあるようであるが、本書は独自の展開を目指した。

一般に文系学問の妙は、先人の研究遺産の精緻な解釈が必要になってくる。本書は限られたページ数の中でこれをなしたつもりである。また、図版などの引用については今日の日本では引用先に断りなく掲載することは引用許可を十分にとっておかなければトラブルが発生してしまう。こうした、下作業の上に、オリジナリティが発揮されなければ、研究とは言えない。だから、研究者の

論文などの著作物は根柢の薄弱な興味本位の物は排除されるのが当然である。したがって、軽いものはあり得ない。この点では、NHKの大河ドラマも目的が視聴率を上げることに力点が置かれると、史実に反する誇張が目立つことになるので、歴史学者はさほど好んではないようである。つまり、研究とはどの分野であれ、地味な時間のかかる作業である。

日本史の変動は経済的な変動、特に土地所有をめぐる権力基盤の形成と葛藤が続く中で言葉はすごみのあるものも多く、調査し執筆していて心を打つものが多く楽しかった。本書の作成には、構想してきたものを退職後の四年半の歳月で書き上げた。

もともと経済学研究を続けてきたが、歴史研究の際立った特徴は時代区分への関心が強いことであつた。

歴史学は戦前期は皇国史観で貫かれ、戦後は唯物史観が跋扈する時期があつた。これら二つの史観は研究の前に結論が決まっており、それに収斂

日本史の変動と 名言摘録

山名年浩



歴史をどう見ろか、
先人の経験はどう生かすか—

時代の変化の中で、日本人はどのような言葉を残してきたのだろうか。
多士済々の人物の名言は現代日本人に生きる意欲や元気を与えてくれる。

吉備人出版 定価：本体 3400円＋税

『日本史の変動と名言摘録』

山名年浩相談役著

吉備人出版・A5判442P

ISBN 978-4-86069-696-2

させるように展開するという点で共通しているが、こうした作法は研究とも学問とも言えない。現在は歴史的な事実は何かの実証が重視されている。

そして、戦前はもちろん戦後の歴史研究の中で、公認の事実とは認められない記述は(特に、学校教科書では)削除され、実証的な研究成果が記載されている。歴史には発見からわかる、ロマンがある。作り話が入らない面白さが歴史のおもしろさであろう。各地で講演をしていると、教育勅語の復活を言う聴衆がおられるが、戦前の憲法の基においてこそその教育勅語であり、現憲法には整合しえない。他方、百姓一揆など民衆の抵抗や反乱で歴史が動いたと断定する史観も不自然である。これら両極の偏りを排して、史実に基づいた歴史研究が求められている。

今日、全国各地の地方史の研究会が盛んなのは、そうした丹念な研究成果の広がりによって表れている。最後に本書を取り上げた、歴史研究会の書評(『歴史研究』2023年4月号 第709号)を掲載させていただく。この歴史研究会は歴史学

者と在野の研究者が共存しているところにある。

『歴史研究』709号の紹介文より

(以下の記事は『歴史研究』誌での本書の紹介文)
歴史を学ぶ意義とはなんだろうか。歴史好きの人であれば、誰もが一度は考えたこと



『歴史研究』709号より
戎光祥出版

のある問いであろう。本書によると、過去の人物の生き方は、現代の人間の生きる糧になるという。

とくに、過去の人物が遺した言葉は、その人物の生き方を端的に表している。

本書は、このような魅力にあふれた日本人の名

言をまとめたものである。本書と世にあふれている名言集との違いは、「時代背景」をはじめとする日本の偉人が偉人たりえた前提を記述している点であろう。

多くの名言集が言葉を単発で紹介し、発言者個人の性格が注目されがちなのに比べて、本書は名言を日本社会のなかに位置づけているのである。

さらに、本書は世界のなかでの日本という国の独自性へ話が展開している。そのうえで、グローバル化の進む現代において、日本が直面している課題について提言している。



山名会歴史討論会で進行をつとめる筆者（左）
（平成27年 京都池坊短大心ホールにて）

日帰りで出石への旅

（豊岡で歴史を再確認）

飯田麻紀子（山名会会員）

令和五年に入り、季節は春へと移り変わりつつある三月三日ひな祭りの日、特急コウノトリに乗り弾丸日帰りで出石への旅に出る。コロナも落ち

着いて穏やかになり、電車内は賑やかな雰囲気です。車窓から見る景色は美しい緑の風景が続く。豊岡駅へ着き、出石行きへのバスへと駅付近のロータリーへ。出石の中心地である辰鼓楼^{しんころう}辺りへ行く前に、出石神社へ参拝しようと思いつく。少し手前の「鳥居」バス停で下車、出石神社の方向へ歩くこと数分。立派な鳥居とともに数年ぶりの風景が蘇ってくる。自然とここに来たいという感覚と、無事に到着できた安堵感・・・感慨深い想いで参拝する。そよ風にたなびく境内にはベンチがあつて、しばらく禁足地のほうを眺めていた。人の立ち入りは禁止されているということは、歴史的に

見ても重要な地と考えられる。大切に、後世にも守り続けられることを祈ってやまない。

その後、境内を後にすると此隅山城跡^{このすみやま}の看板を見つける。神社からほんの数分のところ、文字通り目と鼻の先の場所で一五〇〇年代前半、戦さが繰り広げられ、出石神社も戦乱の影響を受けている。⁽¹⁾

現在はその面影はなく静かだけれいな緑が、清々しい気持ちにさせてくれる。此隅山城跡内の地名が、これから近くまで行く有子山城跡^{ありこやま}の地



出石神社の背後に位置する「此隅山城」。

名と重なるところがあり(2)、何とも興味深い。そして辰鼓楼のある市街地へと移動。歩いて約三キロ、バスではなく徒歩で向かう。途中、田結庄たいのしやう通りとか戦国時代に名前の出る地名が出ていて、その地を訪れる楽しみを味わう。

しばらく歩くと以前、山名会で訪れたあの出石城跡へつながる有子橋へと到着。

『山名』の文字を看板で確認しつつ城跡本丸を目指す。赤い鳥居の連なる階段状の道をのぼると、二の丸を経て本丸。そこからの景色は町を一望できる。その上を

のぼると左手に有子山城跡への石版、右手に稲荷神社が見えてくる。有子山城跡の案内を見ながら自ずと手を合わせる。登頂はややハードと



「有子山城」への登城道に連なる鳥居

推察されるため控え、稲荷神社へ参拝して下山する。観光地を歩き辰鼓楼へ。

出石の代表的な建物を間近で見る臨場感。その後は、帰りの最寄バス停を探

す。スマートフォンで地図を見てもなかなか到着できず、「出石」バス停をやっとの思いで見つける。道路を渡って向かい側のスーパーマーケットが閉店していて、何かさびしい気持ちにもなりながら。日帰り予定なので時間が限られており、出石そばはまたの機会に。

バスの時刻を確認して待合所でペットボトルのお茶を飲みながら待機。時間通りに豊岡駅行きバスに乗りし途中、円山川眺めて、山名氏や垣屋氏はその昔関東から訪れたことを改めて思い起こす。



「辰鼓楼」日本で2番目に古い時計台と言われている。

(3) 時代の移り変わりはあってもその地の歴史は、今も大切なことを教えている。豊岡駅にバスは着き、帰りの特急コウノトリの切符を購入する。帰り道は丹波の様子にも目に焼きつけて。六分の一殿と呼ばれた山名氏は、この丹波も治めていたところもある。複雑な歴史の中で、先人に感謝の祈りとともに。

(1) 『但馬史2』 石田 松蔵著 のじぎく文庫 S

48年第三回配本

335ページ 6行目～7行目

(2) 『但馬の中世史』 宿南 保著 神戸新聞総合

出版センター

2002年第一刷発行

278ページ 12行目～13行目 27

9ページ 図43

(3) 『但馬史2』 石田 松蔵著 のじぎく文庫 S

50年度配本

262ページ 5行目～12行目

参考文献

『兵庫県史第二巻』 S50年1月20日第

2刷発行 兵庫県編集専門委員会

『兵庫県史第三巻』 S53年3月20日発

行 兵庫県編集専門委員会

『新もういちど読む山川日本史』 山川出版

社 2021年9月30日1版4刷 発行



此隅山山頂の本丸跡

山名伊豆守義範公について

『山名赤松研究ノート』第6号〔平成七年（1995）刊行〕から転載

宮田靖國（山名会相談役）

つらつら山名氏時運の没革を考えるに、その誹謗（特に今川了俊著『難太平記』の冒頭内容）に対して、胸中に慷慨の念、鬱勃として起るによりて、ここに一端を吐露したい。

私が一番言いたい事は、山名氏太祖である義範公が鎌倉幕府草創期に於て、平家追討の褒賞である源氏受領六人の内一人、というより筆頭に挙げられているという事実である。即ち、「吾妻鏡」に曰く、

〔文治元年（一一八五）八月〕

「廿九日己卯、去十六日有二小除日、其間書今日到来、源氏多以承^{（山名）}二朝恩^{（大内）}、所謂義範伊豆守、惟義相^{（足利）}模守、義兼^{（加賀美）}上総介、遠^{（加賀美）}光信濃守、義資^{（安田）}越後守、義経伊予守等也、義経朝臣官職事、於^{（義経）}二以前^{（前朝）}一者、二品頻雖^{（義経）}被^{（義経）}二傾申^{（義経）}一、至^{（義経）}二今度^{（義経）}予州事^{（義経）}一者、去四月之比、内々被^{（義経）}レ付^{（義経）}二泰経朝臣^{（義経）}一畢、而彼不義等雖^{（義経）}レ令^{（義経）}二露顯^{（義経）}一、今更不^{（義経）}レ能^{（義経）}レ被^{（義経）}二申止^{（義経）}一之、偏被^{（義経）}任^{（義経）}二勅定^{（義経）}一云々、其外五ヶ国事者、任人面々

直懇望申之間、且募^{（義経）}二勲功之賞^{（義経）}一、且為^{（義経）}レ添^{（義経）}二品目^{（義経）}一、殊所^{（義経）}レ及^{（義経）}二嚴密御沙汰^{（義経）}一也云々、各可^{（義経）}レ令^{（義経）}レ知^{（義経）}二行國務^{（義経）}一之由云々、皆是當時関東御分国也、云々」

と。
ただ、九条兼実の日記である「玉葉」には義経以外の氏名を省略している。

「八月十六日^{（丙寅）}、天晴、今夜有除日、依頼朝申也、受領六ヶ国、皆源氏也、道路以目、不能左右々々、此中、義経任伊予守、兼帯大夫尉条、未曾有々々々、」

しかし、右大臣中山忠親の日記である「山槐記」には、やはり伊豆守、即ち山名義範公が序列の首座である。曰く、

「八月十六日、丙寅、陰晴不定、地動一座、有小除日、源氏任伊豆・相模・上総・信濃・越後・伊予等守云々、」

つまり、山名義範は源氏宗家は別として、一族一門の長老として考えられていたのである。それは当然の事である。なんとなれば、山名義範は新田義重公の長男だからである。後年、北条政子が新田義重の死去に對し、何と言ったか。「吾妻鏡」は次のように伝えている。曰く、「建仁二年（一二〇二）二月」

「廿九日乙亥、中原親能掃部入道が龜谷の宅において御鞠あるべきの由、兼ねて定めらるるの間、殊に結構せらる。金吾頼家出御あらんと欲するのところ、尼御台所政子、二階堂行光をもつて申されて云はく、故仁田入道上西は源氏の遺老、武家の要須なり。しかるに去ぬる十四日卒去し、いまだ廿日に及ばざるに御興遊、定めて人の謗を胎さんか。然るべからずと云々。

金吾、蹴鞠においては機嫌を論ぜざるの由申さしめたまふと雖も、つひにもつて抑留せしめたまふと云々」

これを読んでも、いかに新田義重公の存在が鎌倉幕府に於て大きかったかが分かる。

ただし、山名義範公が源氏受領六人の内の随一に挙げられたのは、新田義重の嫡男という理由もさる

事ながら、直接の所以は戦場での高名手柄であろう。一の谷合戦について「吾妻鏡」（以後の「吾妻鏡」は全て、高崎市刊の「高崎市史資料編4」からの引用文）に曰く、「元暦元年（一一八四）二月」

「五日甲子、西剋、源氏両將到二摂津国、以二七日卯剋一、定二箭合之期一、大手大將軍蒲冠者範頼也、相從之輩、

（中略）

已下五万六千余騎也、搦手大將軍源九郎義経也、相從之輩、

遠江守義定 大内右衛門尉惟義 山名三郎義範

齋院次官親能 田代冠者信綱 大河戸太郎広行

土肥次郎実平 三浦十郎義連 糟屋藤太有季

平山武者所季重 平佐古太郎為重 熊谷次郎直実

同小次郎直家 小河小次郎祐義 山田太郎重澄

原三郎清益 猪俣平六則綱

（下略）

ところで、新田本家は余り鎌倉幕府に於て重きをなさなかつたのではないか、と言う人もあろう。その理由は代々の北条得宗が、新田氏の力を削いでいったからであらうが、頼朝挙兵の時に義重が源義家嫡孫の故を以て、頼朝の下知に従わなかつたから、

かもしれない。「吾妻鏡」の治承四年九月の条に曰く、

「卅日己卯、新田大炊助源義重入道、^(註)臨下東国未二揆一之時上、以二故陸奥守嫡孫一、挿二自立志一之間、武衛雖^(源頼朝)遣二御書一、不^(源義家)能二返報一、引二籠上野国寺尾城一、聚二軍兵一、又足利太郎俊綱為二平家方人一、焼二弘同国府中民居一、是属二源家一輩令二居住一之故也、」

そのためであろうか、奥州征伐の時、文治五年（一一八九）七月には、足利義兼や山名義範は北条時政や義時の上位に置かれているが、新田義兼は北条の下位である。「吾妻鏡」に曰く、

「十九日丁丑、巳剋、二品為^(深)征二伐奥州泰衡一発向給、（中略）凡鎌倉出御勢一千騎也、

次御駕、^(御弓袋迄、御服等、在御馬前、)自二鎌倉出御一御供輩

武蔵守義信^(平賀) 遠江守義定^(大内) 参河守範頼^(深)

信濃守遠光^(加賀美) 相模守惟義^(山内) 駿河守広綱^(安田)

上総公義兼^(足利) 伊豆守義範^(山内) 越後守義資^(安田)

豊後守季光^(毛) 北条四郎^(時義) 同小四郎^(義時)

同五郎^(時連) 式部大夫親能^(中原) 新田蔵人義兼

浅利冠者遠義^(毛) 武田兵衛尉有義^(時義) 伊沢五郎信光

加々美次郎長清^(時義) 同太郎長綱^(時義) 三浦介義澄

同平六義村 佐原十郎義連 和田太郎義盛

同三郎宗実 岡崎四郎義実 同先次郎惟平

土屋次郎義清^(前城) 小山兵衛尉朝政 同五郎宗政

同七郎朝光 下河辺庄司行平^(吉見) 吉見次郎頼綱

南部次郎光行^(頼谷) 平賀三郎朝信^(安田) 小山田三郎重成^(福毛)

同四郎重朝 藤九郎盛長^(安田) 足立右馬允遠元

土肥次郎実平 同弥太郎遠平 梶原平三景時

同源太左衛門尉景季 同平次兵衛尉景高 同三郎景茂

同刑部丞朝景 同兵衛尉定景 波多野五郎義景

波多野余三実力 阿曾治次郎広綱 小野寺太郎道綱

中山四郎重政 同五郎為重 渋谷次郎高重

同四郎時国 大友左近将監能直 河野四郎通信

豊嶋権守清光 葛西三郎清重 同十郎

江戸太郎重長 同次郎親重 同四郎重通

同七郎重宗 山内三郎経俊 大井二郎実春

宇都宮左衛門尉朝綱 同次郎業綱^(二階堂)

八田右衛門尉知家 八田太郎朝重 主計允行政

民部丞盛時 豊田兵衛尉義幹 大河戸太郎広行

佐貫四郎広綱 同五郎 同六郎広義

佐野太郎基綱 工藤庄司景光 同次郎行光

同三郎助光 狩野五郎親光^(中) 常陸次郎為重

同三郎資綱 加藤太光員 同藤次景廉

佐々木三郎盛綱 同五郎義清 曾我太郎助信

橘次公業（小徳盛） 宇佐美三郎祐茂 二宮太郎朝忠

天野右馬允保高 同六郎則景 伊東三郎

同四郎成親 工藤左衛門祐経 新田四郎忠常（三）

同六郎忠時 熊谷小次郎直家 堀藤太

同藤次親家 伊沢左近将監家景 江右近次郎

岡辺小次郎忠綱 吉香小次郎 中野小太郎助光

同五郎能成 渋谷五郎兼保 春日小次郎貞親

藤沢次郎清近 飯富源太宗季 大見平次家秀

沼田太郎 糟屋藤太有季 本間右馬允義忠

海老名四郎義季 所六郎朝光 横山権守時広

三尾谷十郎 平山左衛門尉季重 師岡兵衛尉重経

野三刑部承成綱 中条藤次家長 岡辺六野太忠澄

小越右馬允有弘 庄三郎忠家 四方田三郎弘長

浅見太郎実高 浅羽五郎行長 小代八郎行平

勅使河原三郎有直 成田七郎助綱 高鼻和太郎

塩屋太郎家光 阿保次郎実光 宮六廉仗国平

河勾三郎政成 同七郎政頼 中四郎是重

一品房昌寛 常陸房昌明 尾藤太知平

金子小太郎高範

さて、頼朝を征夷大將軍に任ずる勅使が鎌倉に到着した建久三年（一一九二）七月二十七日、その接

待の宴席に源範頼等源氏一門と共に山名義範は列席している。「吾妻鏡」に曰く、

「廿七日丁酉、將軍家令レ招二請両 勅使於幕府一給

於二寝殿南面一御対面、有二献盃一加賀守俊隆、大

和守重弘、小山七郎朝光等從二所役一、前少將、

参河守、相模守、伊豆守等候二其座一、及二退出期

一、各給二鞍馬一、（山名義範）左衛門尉祐経、朝重等引レ

之、両客降二庭上一請二取之一、一拜之後退出云々、

又、頼朝が元氣な頃は山名義範の方が足利義兼より

も上位に記載されている。その例をあげると、頼朝が二男千幡丸（後の実朝）の誕生に際し、源氏一

門や有力御家人を召集して、千幡丸の披露と酒が振

舞われた。

「吾妻鏡」に曰く、

「五日癸卯、（中略）而今日被レ召二聚武藏守、

信濃守、相模守、伊豆守、上総介、千葉介、小

山左衛門尉、下河辺庄司、小山七郎、三浦介、佐

原左衛門尉、和田左衛門尉等於浜御所、各着二

北面十二間一、將軍家自奉レ懷二新誕若公一出御、

此嬰兒鍾愛殊甚、各一レ意而可レ令レ守二護将来一

之由、被レ尽二慰御詞一、剩給二盃酒一、（下略）」

次は有名な曾我兄弟の仇討ちの時であるが、曾我五郎が召出された時、供奉人達の着座の様子を「吾妻鏡」は次のように伝えている。曰く、

「廿九日甲午、辰剋、被レ召ニ出曾我五郎於御前庭上、將軍家出御、揚ニ幕ニケ間、可レ然人々十余輩候ニ其砌一、所謂一方、北条殿、伊豆守、上総介、江間殿、豊後前司、里見冠者、三浦介、畠山二郎、佐原十郎左衛門尉、伊沢五郎、小笠原二郎、一方、小山左衛門尉、下河辺庄司、稲毛三郎、長沼五郎、榛谷四郎、千葉太郎、
(後略)」

建久六年(一一九五)三月十日に上洛した時には山名小太郎(重國)は着甲の随兵ではなく、狩装束で將軍御車のすぐ後に従っているのである。無論、着甲より狩装束の方が格はずっと上である。

「十日乙未、將軍家為下令レ逢ニ東大寺供養一給上、着ニ御于南都東南院一、自ニ石清水一、直令ニ下向一給云々、供奉人行列、先陣

(中略)

次御随兵、三騎相並、各家子郎從同着甲胄列傍路、其人数所随合期也、

(中略)
河内五郎(長義) 曾祢太郎
武田兵衛尉(信義) 伊沢五郎
新田藏人

將軍御車

相模守(大内惟盛) 源藏人大夫
伊豆守(山名義經) 源右馬助 相並
上総介(足利義滿) 相並

因幡前司(大江広元) 三浦介 相並

豊後前司(毛利季光) 山名小太郎

土肥荒次郎 足立左衛門尉
那珂中左衛門尉(能員)

藤九郎(安藤盛長) 宮大夫 所六郎
比企右衛門尉

已上狩装束

次御随兵 三騎相並、家子郎等事同ニ先陣一

小山左衛門尉(朝政) 北条五郎(時連) 平賀三郎(朝信)

奈古藏人(義行) 徳河三郎(義季) 毛呂太郎(季綱)

南部三郎(光行) 村上七郎(頼直) 毛利三郎(頼隆)

浅利冠者(長義) 加々美二郎(長清) 同三郎

後藤兵衛尉(基清) 葛西兵衛尉 比企藤次

稲毛三郎(重成) 梶原源太左衛門尉 加藤太

阿曾沼小次郎(頼綱) 佐貫四郎(広綱) 足利五郎(義氏)

小山五郎(余政) 三浦平六兵衛尉 佐々木左衛門尉(定綱)

小山田四郎 野三刑部丞 佐々木中務丞

波多野小次郎 同三郎

沼田太郎

(下略)

少し横道にそれるが、ある学者は、佐々木氏は四兄弟が平家追討に高名手柄を立てたので、頼朝から近江、越後、出雲、石見、隱岐、備前、長門、淡路、阿波、伊予等の守護に任命された故に、山名氏よりも上であるかのように吹聴しているが、認識不足も甚しい。なぜなら鎌倉時代の守護と室町時代の守護とは格が全然違うのである。つまり、室町時代の守護は守護大名なのである。第一、山名家は清和源氏の一門であって、右の「吾妻鏡」の引用にも見える如く、まったく別格なのである。

ただし、私が述べているのは鎌倉初期であり、某学者が主張しているのが鎌倉末期というのであれば一理なきにしもあらずである。北条氏が源氏宗家を滅ぼし、源氏一門を排斥した事からも推測されるから。

新田義兼嫡孫の政義は、「吾妻鏡」の寛元二年六月十七日の条によれば、

「十七日丙戌、新田太郎大番を勤仕せしめんがために在京す。これ上野の国役たるが故なり、しかるに所労と称し、にわかに出家を遂ぐ。ただ

し事の由を六波羅ならびに番頭城九郎泰盛に相触れざるの由、注進状あるによつて今日評定の次に沙汰を経られ、定め置かれる旨に任せて、所領を召し放さるべき由定めらると云々。」

と、ある。これによつて新田政義は全ての所領を没収されたのである。

無論、頼朝も悪い。義経や行家や、はては範頼まで殺してしまつたのだから。北条氏が頼家や実朝や公暁等を謀殺しても誰も文句が言えないのである。

阿野全成や平賀朝雅も討たれた。いわんや、千葉氏、梶原氏、比企氏、畠山重忠、三浦氏、安達氏等々が滅亡させられたのは、一に北条氏にとつて脅威であつたからである。ひたすら汲汲として阿諛追従あゆつしやうに憂き身をやつした足利氏や佐々木氏等が生き延びたにすぎない。

故に、幕府で引付衆をしていた山名一族が建武親政の三十年ほど前の正安三年（一三〇一）八月廿五日に謀叛の科で捕えられ、誅殺されたのは事実である。

ちなみに「吾妻鏡」にある引付衆を引用する。日付は正嘉元年（一二五七）閏三月二日である。

「二日丁巳、晴、今日評議之時、更被^レ結ニ番引

付人数一、自ニ来月朔一、以ニ此衆一可レ行之由、
被ニ定下ニ云々、

(中略)

四番 二日 廿二日

和泉前司行方

(符野)
前太宰少式為佐

那波左近大夫將監政茂

(天野)
対馬前司倫長

山城前司俊平

甲斐前司家国

山名中務大夫俊長

雜賀太郎尚持

五番 七日 廿七日

秋田城介泰盛

(二階堂行綱)
伊勢入道行願

武藤少卿景頼

(二階堂行忠)
信濃判官入道行一

中山城前司盛時

佐藤右京進

山名進二郎行忠

齋藤二朝俊

その四年後の弘長元年(一二六一)三月廿日にも
同様の文面が記述されている。

「廿日壬午、雨降、今日、評定衆召ニ連署起請一、

常陸介入道行日依レ不ニ加判一可レ離ニ其衆一、

次引付衆等、進ニ別紙起請一、又新制事、今日

始施ニ行之一、引付結番被レ改レ之、

(中略)

四番 七日 廿二日

和泉前司行方

前大宰権少式入道連佐

(天野)
対馬前司倫長

(那波)
刑部権少輔政茂

(後藤)
宅岐前司基政

(深田)
山城前司俊平

五番 十二日 廿七日

秋田城介泰盛

(二階堂行忠)
大宰権少式景頼

伊賀前司時家

(二階堂行忠)
信濃判官入道行一

隱岐大夫判官行氏

(中野)
中山城前司盛時

佐藤民部大夫行幹

山名進次郎行直

齋藤次朝俊

引付衆とは、「日本史辞典」(角川書店刊)によれば「評定衆が兼ねる引付頭人に属して訴訟の審理にあたる。有力御家人から選ばれたが評定衆に昇進する例が多い。のち次第に北条一族に占められた。」と、ある。

したがって、「尊卑分脈」の山名俊行に後付してある記載は事実であろう。ちょうど「吾妻鏡」の記録が欠けている時期の事件だから、作文だという人もいるが、私は真実だと思う。傍証となるのは、藤原北家の系図に「範俊の女は山名忠俊の室」とある。しかも、その曾孫に「山名」姓を名乗らせているのは、丁度、北条氏が滅亡した頃であり、もう本姓を名乗り出ても殺される危険が無くなったからである

う。

「山名家譜」にも、俊行、行直、為俊等が亡ぼされ、伊豆守跡の家督が小次郎義俊（弥次郎政氏の父、つまり時氏の祖父）へ移った、とある。これは太郎系統の本家から次郎系統の分家に山名氏の惣領権が移った事を意味する。故に巷間伝えられる処の、山名本家は新田義貞に従い、山名分家は足利尊氏の麾下に入ったというは妄説であろう。

その根拠は、山名氏中興の祖、時氏公にある。北条氏にとって「時」は代々の通字である。時氏にその「時」の偏諱^をを冠することを許容したのは、やはり時氏が当時の山名氏一族の棟梁だったからに他ならない。北条得宗で「時」の通字が付いていない者は誰も無いと言っても過言ではない。勿論、足利高氏や佐々木高氏は「高」の字がついている。これは得宗高時から偏諱を賜ったのであろう。この場合、「時」よりも「高」の方が上にあるから良いのである。ということは足利高氏はやはり幕府の中央に居たことになり、もし、山名時氏が山名一族の逼塞^{ひつそく}していた分家なら、足利氏の惣領と結びつくことは考えられないのである。なぜなら、時氏の母は足利高氏の母の叔母である。つまり時氏と足利高氏の母と

はイトコ同士である。故に氏清と高氏はマタイトコなのである。こんな間係は山名氏の棟梁であって始めて可能な事であるから、時氏が山名氏分家の出自であるはずがない。ちなみに足利高氏の母は上杉清子である。

では、新田義貞隸下の山名氏は誰か。それは「尊卑分脈」にあるように、山名氏の太郎系統か、あるいは三郎系統の人々ではなかるうか。その人達は北条氏の圧政の為に逼迫^{ひつぱく}していたから、義貞が生品明神で旗挙げした時、駆せ参じたのであろう。時氏は鎌倉にあって、初めから足利高氏と行を共にしたと考える方が自然である。

ところで、前号の「両氏研究ノート」に、「太平記」には後醍醐天皇に対する批判が随所に見られる、と書いたが、ある人から、「どこにそんな文章があるのか」と尋ねられたので、ほんの一、二、例をあげると、

第一巻の「関所停止事」の末節に、

「誠に理世安民ノ政、若機巧ニ付テ是ヲ見バ、命世亞聖ノオトモ称ジツベシ。惟恨^{ただうらむ}ラクハ斉桓霸ヲ行、楚人弓ヲ遺^{わす}シニ、叡慮少キ似タル事ヲ。是則^{ゆえん}所以草創雖并一天守文不越三載也。」

と、ある。誠に意義深い名句であり、わざと難解にしてある。と、いうことは作者の一番言いたい事であり、最も重要な命題なのであろう。意味する処はこの霸者的で狭量であらせられたことが、折角天下を併せながら、これを維持すること三年を越えなかった理由である、と言っている。これは後醍醐天皇が王道を忘れ、霸道を行われたと批判したのである。ただ、天下麻の如く乱れている時だから、止むを得ないではないか、とおつしやる御仁もいらつしやるであろうから、これは扱置き、次は如何でしょう。やはり、第一巻の最初の方に入りますが、と言うより、前文の次にある「立后事付三位殿御局事」の文。

「前略」

其比安野中将公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、中宮ノ御方ニ候レケルヲ、君一度御覽セラレテ、他ニ異ナル御覺アリ。三千ノ寵愛一身ニ在シカバ、六宮ノ粉黛ハ、顔色無ガ如也。——中略——是ヨリ君王朝政ヲシ給ハズ。忽ニ准后ノ宣旨ヲ下サレシカバ、人皆皇后元妃ノ思ヲナセリ。驚見ル、光彩ノ始テ門戸ニ生ルコトヲ。此時天下ノ人、男ヲ生ム事ヲ輕ジテ、女ヲ生ム

事ヲ重ゼリ。サレバ御前ノ評定、雜訴ノ御沙汰マデモ、准后ノ御口入トダニ云テゲレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ與、奉行モ理有ヲ非トセリ。関雎ハ樂而不淫、哀而不傷。詩人採テ后妃ノ徳トス。奈何カセン、傾城傾國ノ乱今ニ有ヌト覺テ、浅増カリシ事共也。」

長恨歌の単なる換骨奪胎にすぎぬと一笑に付される方もいらつしやるだろう。私も長恨歌は諳じているので、その引用の多さには辟易する。しかし、そこが作者の狙いなのではなからうか。つまり、玄宗皇帝が楊貴妃を偏愛したが故に安祿山の乱を勃発した事は、周知の史実である。作者は安祿山の乱を想起せよ、と言いたかったのであろう。と、すれば、臆測を逞しゅうせずとも、後醍醐天皇が阿野廉子を寵愛された事が、南北朝動乱の原因である、と言っているのと同然である。勿論、阿野廉子は隠岐まで同行したのだから、討幕という、後鳥羽上皇の成し遂げられなかった回天の鴻業を成し終えられたは廉子の功に帰すべし。されば、その勲功に比ぶれば、恩賞の沙汰に口入せしが如き罪科は輕微なり、と憤られる方もいらつしやるであらう。しかし、右の太平記の一文は阿野廉子批判、ひいては後醍醐帝への

諷刺であることに变りは無い、と思います。

ただ、「太平記」は庶民が読んだと言うよりは、太平記読み、と称する、講談師の走りのような者が、辻説法のように語って講釈したのであるから、難しい処は跳ばして、聴衆が瞠目するような華々しい合戦場面だけを読んで聞かせたかもしれない。視聴者の喜びそうな事しかないのは、今のテレビを見ていても十分うなずける事である。と、すれば判官鼻屑で、滅びし者は麗しいとなり、後醍醐天皇賛美、崇拜となるのも人情のしからしむ処かもしれない。

さて、横道はこれ位にして、本論に戻ろう。私が筆を執った動機は、今川了俊著「難太平記」の山名時氏公の科白に腑に落ちない処があるからである。

「我建武以来は当御代の御かげにて人となりぬれば。元弘以往はたゞ民百姓のごとくにて上野の山名という所より出侍しかば。渡世のかなしさも身の程も知にき。又は軍の難儀をも思ひしりにき。されば此御代の御影の忝事をもしり。云々」

と、あるが、これは若い時に領地に居て、民百姓と共に汗を流した経験を誇張して言ったか、又は將軍の御蔭だと言って、敵対しない事を示すセスチャー

にすぎない謙遜を、今川了俊が真に受けたか、である。なぜなら、山名時氏公の肖像画（左図）を見ると、目尻に皺の多い人である。これは神経が繊細で感受性に富み、人に気をつかう性質を示している。単刀直入に言う、と、頭脳明晰、気苦労の多い人だ。

しかし、もう一度よく検討するために、「難太平記」の序文ともいうべき部分を全文引用してみよう。「愚なる身にはをのれが心をだにしらぬ成べし。譬へばおしき。ほしき。にくし。いとをしきなど思をしらざるにはあらず。かやうに覺る心はいかなる物ぞとしるべきを申なり。又をのれが親祖はいかなりしもの。いかばかりにて世に有



山名時氏公像（国会図書館蔵）

けるぞとしるべきなり。人の事は知侍らず。我身にて思ふに我父より先の事はつや／＼しらざるなり。をのづから故殿今川範國の昔物語などし給ひし次でに。かたはし仰られし事の今わづかに覺るを申べし。是を思ふに我子ども孫共は更に父がたゝずまひをだに知べからず。昔山名修理大夫時氏（ひ）といふ後小松は明徳に内野のいくさにうたれし陸奥守が父なり。それが常に申しは我子孫はうたがひなく朝敵に成ぬべし。其謂は我建武以來は當御代の御かげにて人となりぬれば。元弘以往はたゞ民百姓のごとくにて上野の山名といふ所より出侍しかば。渡世のかなしさも身の程も知にき。又は軍の難儀をも思ひしりにき。されば此御代の御影の忝事をもしり。世のたゝずまひも且は弁たるだに。今はやゝもすれば上をもおろそかにおもひたり。人をもいやしく思ふにて知ぬ。子どもが世と成ては君の御恩をも親の恩をもしらず。をのれをのみかじやかして過分にのみ成行べき程に。雅意にまかせたる故に御不審をかふむるべきなりと子息どもの聞處にて申き。如レ案御敵に成しかば。昔人はかやう

の大すがたをばよく心得けるにや。實此人一文字不通なりしかども。よく申けるにこそ。さればわが身にも故殿の常に被レ仰しことに。其世にはさまでよき事とも不レ存。剩もどかしき様にも思ひしを。今思ひあはすれば。一としてことはりならずという事なし。我身今老ぼれぬれば。子どもにもうめる子のごとくにおもはれれども。なからん跡に定又思ひ知るべきや。其爲に父の語給ひし事のはし／＼を書付侍るなり。是もひが覚え多かりぬべきをばみな畧したり。たしかに覚え又支證分明の事計を申なり。神代には唯二人の子なりけめども。其子孫さまざま生れもてきて。其末々或國王。大臣。或民百姓となるぞかし。いやしく世の爲無益の人は田を作。人につかへなどせしより氏なき者に成來けり。今も我等事はわづかに父の世ばかりこそ知侍れ。二三代の祖の事などはつや／＼しらねば。終に我子孫は必定氏なき民とおなじ者になりぬべし。されば今わづかに聞えたる片はし計かき付る也。」

この文脈から考えると、時氏の科白は今川了俊の

創作ではないかという疑念に取り付かれる。つまり、了俊は子孫が驕り昂れば滅ぼされるから、子孫を諫める意図で「難太平記」を著した、と考えられる。ということは、時氏の言葉としてゐるが、実は今川了俊本人の本音であると言っても中らずと雖も遠からずであろう。

明徳の乱を他山の石として、自分の子孫に自重を促しているのであるが、今川了俊本人が足利義満から、足利氏満との結託を疑われ、応永七年（一四〇〇）謀叛の科で追討を受けたのだから、山名氏清の末路に自分の子孫の将来を予見し、了俊の胸奥を時氏公の名を騙って吐露したのである。故に、山名時氏公の科白は今川了俊の創作であると断言しても過言ではない。

ちなみに、「難太平記」に記載された明徳の乱に關して、「両氏研究ノート」第五号に、私が「後円融上皇は氏清の討死によって、御落胆の余り崩御された、と推測する」と書いたところ、某氏から反論があり、「氏清公討死は明徳二年十二月三十日。神器の土御門内裏帰座は明徳三年閏十月五日。後円融上皇晏駕は明徳四年四月二十六日。故に、南北朝合

御落胆の為ではない」という御主旨であつた。

しかし、前号で私が縷縷詳述したように、後円融上皇は義満が宝祚を篡奪せんとしていた事を痛切に感じておられたし、その陰謀を知悉されていた。故に、南北朝合体は北朝にとって、一見目出度いように見えるけれど、逆に言えば、以後に皇祚を義満に篡奪されると、もう天皇家は存続しなくなってしまうのである。まだしも、合体せずに南朝が別に存在する方が、北朝は義満に乗っ取られても、南朝の皇統が残る、とお考えになつたのではなからうか。つまり、合体後に義満に宝祚を篡奪されると、万世一系の皇統が絶えてしまうと絶望され、御悲憤のあまり昇遐されたとは私は推理する。

それは扱置き、もう一つ道草を食う事をお許し頂きたい。それは第三号の「両氏研究ノート」に、氏清公の領国として、山城国、丹波国、但馬国、和泉国、摂津半国（中島郡、東成郡、西成郡、住吉郡）と書いたところ、山城国はありうるかもしれないが、摂津半国はいかがなものか、という御指摘を受けていた。しかしながら、それには根拠があるので記載したい。

石清水文書之六、菊大路家文書に曰く、

大路家文書に曰く、

七一 山名氏清寄進状

寄進
石清水八幡宮

攝津國榎並上東方土貢内參拾石事

右、爲天下泰平家門繁昌、殊心中所願成就、奉寄如件、

永徳二年十月十六日

前陸奥守源朝臣^(山名氏清)(花押)

六七 山名氏清寄進状

寄進

石清水八幡宮

和泉國加守郷内^{五拾石}事

右、爲天下安全家門繁昌、殊心中所願成就圓滿、奉寄如件、

永和五年二月廿二日

前陸奥守源朝臣^(山名氏清)(花押)

山名伊豆守義範公について

この永徳二年には、北朝に降っていた楠正儀が南朝に復歸した年でもあり、後小松天皇(海音寺潮五郎が義満の実子だと主張する)が四月十一日に踐祚^{せんそ}された年でもある。又、翌永徳三年は義満が准三后となった年でもあり、赤松氏範公が討死された年でもある。しかし、長慶上皇の御願文「右今度之雌雄、思の如くば殊に報賽之誠を致すべし」は元中二年・至徳二年(一三八五)の事である。永徳二年(一三八二)とは三年の隔りがある。氏清の「殊心中所願成就」とは何の関係も無いのであろうか。

私の思い過ごしかもしれない。氏清の願成就は口癖かもしれない。次のようなものもある。同じく菊

宮田左近大夫將監時清を太祖とする宮田氏は、山名氏清の子孫であるから清和源氏に決っているが、本によつては清和源氏の一族に載っていない事がある。その理由は「尊卑分脈」にある。他の氏族の目に関する出典は、ほとんどが「尊卑分脈」に拠っている。ところが、山名左近大夫將監入道調心が宮田氏を名乗ったのは、「尊卑分脈」を編纂した洞院公定が死んだ後だからである。いくら宮田時清と洞院公定は血がつながっていると言っても、又、公定が左大臣であつたと雖も、死んでからでは書きようが無かつたのである。つまり、洞院公定が薨去した

のは応永六年六月十五日であり、山名左近大夫が宮田庄を將軍義持から宛行われたのは応永十六年であり、宮田を以て家号としたのは、それ以降だからである。

「明德記」には、山名陸奥守氏清の嫡子として宮田左馬助時清と書いてあるが、後年、時清が左近大夫將監に任ぜられたのは、おそらく、母方の持明院家の人達が近衛府の中將や少將として、分家も含めれば綺羅星の如くいたからであろう。たとえば叔父の保定は左少將であり、時清の祖父は左中將、時清の母の叔父も左中將であった。持明院家の分家も四五家あるが、同世代で少將、中將を探すと、家藤、基秀、基兼、基清、家秀、行雅、家相、基清、基員、基数、基明等々である。基の通字が多いから同じ持明院家の人と思われるかもしれないが、まったく別家である。しかも時清の母の兄弟か、母の父の世代の人々に限っての事であるから、実際はもっと多かったであろう。かかるが故に、持明院家の人々は実戦部隊の指揮官として、千軍万馬の時清なら最適と考えて登用したのではあるまいか。時清は、明德の乱も応永の乱も南朝側であったではないか、と言われるかもしれない。だから、勿論任命されたのは、

応永の乱以降で応永十六年以前であろう。その間には時清の弟達が石見国や安芸国の守護となって活躍していたし、又、義兄常熙は幕府の重鎮であった。加之、南北朝は合体していたのだから、理屈の上では最早南朝も北朝も無いのである。それよりも実際問題として、騒然たる時世であるから、天皇の身辺警護役として、これほど打って付けの人物は居なかったのではないか。つまり、左近將監は現代風に言えば、近衛師団の連隊長ぐらいであろう。又、少將は旅団長で、近衛中將は近衛師団長に相当する。勿論、当時は中將も少將も近衛府の次官である。ただ、大夫將監は五位で昇殿を許された殿上人であるから、欧米流の代將か准將と言ったところか。なにはともあれ、戦斗力のない持明院家の人達は実戦の部隊長に実の甥を任命していた事になる。

閑話休題。宮田時清が死去したのは「看聞御記」の記載通り、応永二十八年四月晦日である。なぜ「看聞御記」の著者である伏見宮貞成親王（後崇光上皇）が、宮田を御存じであられたかと言えば、「看聞御記」の応永二十三年七月三日の條に、「先日物語僧又被召語之。山名奥州謀反事一部語之。有其興」

とあり、又、永享六年二月九日の條には、
「内裏依仰明德記三帖。堺記一帖進之」
とあるからである。

「明德記」と「堺記」の両方に宮田左馬助時清
(後の宮田左近大夫将監) は登場する。内裏とは後
崇光院の皇子であられた、後花園天皇のことである。
尚、「有其興」とは如何なる意味なのであろうか。
たゞ単に英雄譚、合戦譚に興味があられたのであろ
うか。義満に対する遺恨ばらしに欣懷され、快哉を
叫ばれたと言えは揣摩臆測にすぎるのであろうか。
あるいは、やはり端倪すべからず、と言うべきで
あろうか。

令和5年度の山名会総会は、源氏武家政権
の発祥地鎌倉を訪ねるにあたり、鎌倉政権
誕生に大功があった山名初代義範公に関す
る文書を再掲載させて頂きました。



山名会総会で歴史講演を行う筆者
(平成24年 京都・東林院にて)

西陣、東陣の発展をめざして

山名靖英（山名会理事長）

西陣は、京都市上京区に位置している。「西陣」は「西の陣」の意。

かつての「応仁の乱」において、山名宗全公がここに陣を構えたのでこの名前が付いた。いまでも「山名町」という町内が存在している。

山名町内には、「山名宗全公館跡」があり、毎年町内の方々が清掃活動をされ守っていただいていることに感謝で一杯である。（写真A）

そし

て、「私たちの町に山名宗全公の館があったことに誇り



（写真A）宗全邸跡の石碑
（上京区山名町）

を持っています。」と語られている。

「西陣」は日本人なら知らない人はいない有名な地域である。

特に、「西陣織」は、1200年の歴史を刻む京都の伝統産業として全国に名を轟かせ栄えてきた。一昔前には、狭い路地奥に入ると、「バシヤンバシヤン」という機織りの音が方々から聞こえていたものだ。

1467年、「応仁の乱」が勃発すると、織物職人は全国に避難したが、10年後には再び京都に戻り、織物の町が復活したという。この頃から「西陣」と呼ばれるようになったそうだ。

現在は、約300の織物業者がおられ、約2万人の方が機織りに従事され、年間300億円の出荷額で、日本を代表する織物の町である。（西陣

一方、「応仁の乱」での山名側の陣(「西陣」)に対し、細川勝元陣営は、東の陣(「東陣」)を築き、堀川通りを挟んで兵を集め対峙した。その数山名側9万に対し、細川陣営は16万と伝えられている。かなり誇張されている感がする。堀川通りを挟んで、これだけの兵が対峙したとは考えられない。

ともかく、乱は10年近く続き、京都の上半分は焼け野原になったことは事実である。応仁記には「汝やしる 都は野辺の夕雲雀^{ひばり} 上がるを見ても 落つる涙は」と書かれている。

京都上京の人は「先の鬨い」といえば、第二次大戦ではなく、「応仁の乱」のことをいうようである。

戦いが終焉して、西陣は織工が帰ってきて、西陣は元の活気を取り戻す。しかし、細川が陣を張った「東陣」は、特段の賑わいもなく、今日に至っているのだ。

そこで、西陣だけに焦点があてられるのではなく、東陣の存在も広く知ってもらい上京区の振興にと発足したのが「東陣プロジェクト」である。

その発足に際し、京都市上京区地域力推進室が音頭を取って、山名、細川両家の代表が相まみえてシンポジウムが開催された。(2017年6月)

細川家からは、永青文庫理事吉丸治氏が参加。山名側からは、私山名靖英が出席した。定員300名のところ、400名に近い市民が参加をされるほどの大盛況でした。(写真B)

以下、シンポジウムの様子をご報告いたします。(上京区ホームページより一部加筆し転載します)



(写真B) シンポジウムの記事

タイトル「応仁の乱」今輝け！を訪ねて

特別対談・「応仁の乱550年目を迎えて」

コーディネーター…井上満郎氏

(京都市歴史資料館館長)

〔井上氏〕

応仁の乱は、1467年正月から1477年1月まで11年間の内乱であった。

京都が受けた被害も歴史の中で最大である。京都での被害は当初の3、4年間に集中している。戦力の中心は足輕。農民からの徴兵であり、農繁期もあるので、毎日戦いが続いたわけではない。平穏な時期もしばしばあったということに留意しておく必要がある。

乱の原因は將軍家などの家督争いだ。家督はその家の財と地位を継承すること。一方は細川勝元に付き、他方は山名宗全に付く。個人対個人の争いではない。

東軍16万人、西軍9万人というのが、戦力の主

軸となった足輕は大半が地方から徴兵されており、京都で略奪まがいのことを行った。京都への思い入れや愛着を持たない。破壊に対しての悲しみもない。これがすべてを焼き尽くす戦いとなった大きな要因の一つである。

〔司会〕

それでは、御両家からお話をいただきます。それぞれの方、と当時の足利幕府の要職を占められるまでの経緯、応仁の乱以降今日に至るまでの過程、一族の皆さん活躍などお話をいただきたいと思っています。細川側からどうぞ。

〔吉丸氏〕

約700年前に、足利本家が三河の守護大名になったときに、その一門であった足利義季が、三河国（愛知県岡崎市）額田郡に領地をいただいた。その村が細川郷だったので、その地名を名乗った以降、代々細川を名乗って今日に至っている。

三河から始まった細川一門は、その後、足利本

家と連携を取りながら成長し、足利尊氏の時代には尊氏を助けながら室町幕府につながってゆき、京都が最終の活動の舞台になった。

細川家の初代となる頼之は、三代將軍義満を助け、最初の菅領に任命された。以降、細川家が代々菅領を務めた。

この頼之の弟が頼有であり、現在の細川護熙さんは、頼有の系統につながっている。

〔山名氏〕

山名家は、清和源氏の流れを汲み、源義家の孫に当たる新田義重の三男義範が上州（群馬県高崎市）山名郷を分け与えられ、その土地の名前をとって山名と名乗ったのが始まりだ。

山名八幡宮が建ったのが1175年頃ですから、それよりも前に山名を名乗っていたので、約850年以上続いていることになります。

山名義範は、源頼朝が鎌倉で挙兵したときに、いち早く参戦し、源平の戦いで武功を上げ、源姓を名乗ることを許されました。以降、代々引付衆

という高い役職に就いています。

山名時氏が足利尊氏と一緒にになって北条執権の専制制度に対して戦いを行って名を上げました。

室町時代には、三菅四職の職家の一つとして勢力を拡大。一時は、日本全体の六分の一の勢力を占め、「六分の一殿」といわれるほどの勢力がありました。

〔司会〕

愛知県や群馬県から起こった氏族が、やがて室町幕府の時代に京都に集まり、共に幕府の政治を動かすまでに成長した。

そして、將軍や他家の家督争いに巻き込まれて互いに大将として戦わずにはいられない状況に追い込まれていったわけですね。

そこで応仁の乱の概要について、お聞きしたい。

〔山名氏〕

戦国時代の初頭に起きたのが「応仁の乱」です。むしろ「応仁の乱」があつて、戦国時代を迎えた

といえます。

当時の將軍足利義政よしまさは、性格的に優柔不断だったといわれています。將軍職を自分の弟の足利義視よしみに譲ると約束しながら、妻の日野富子が懷妊よしなほし義尚よしなおが生まれると、富子是我が子を將軍職に継ぐことを願ひ、後継者争いが始まりました。

義視は細川に後押しを頼む。富子は山名に義尚を推すよう依頼した。正に後継者争いが争いの大きな要因となった。加えて、畠山家の相続争いや斯波家の相続争いが絡んで、発展したのが「応仁の乱」です。

本来、山名家と細川家は姻戚関係にあり、仲が良かった。

それが、いわれるように將軍家はじめ他家の家督争いに巻き込まれてしまったのです。

いわば代理戦争であって、両家とも迷惑至極の話だ。

（宗全公とはどんな方だったでしょうか？）

山名宗全という人は、「赤入道」といわれたそうだが、直情型で、不正や裏切りには、真っ赤に

なつて激怒したそうです。

足利義政の父義教よしのりが暗殺された時、赤松光弘みつひろが後ろから切り付けた。宗全公は烈火のごとく怒った。豪放磊落な性格。正義を貫く人であった。私達に生き方を教えてくれている。

〔司会〕

応仁の乱以降の両家はどのように活動されてこられたのでしょうか？

〔吉丸氏〕

室町幕府とともに本家筋は全部滅んでしまいました。次男頼有の筋の細川藤孝ふじたか（幽齊ゆうさい）が、文武両道において秀でて、信長、秀吉、家康に仕えた。中興の祖である。幽齊は、長岡京の青龍寺（勝龍寺）城を信長から拝領し、その後、丹後の宮津城、田辺城を手に入れて、京都を治めていく。二代目忠興ただむきは関ヶ原の戦いで功があり、九州豊前小倉39万9千石を与えられた。やがて、肥後54万石に加増される

こうして近代につながり今日の細川家を築いていく。この幽齊から数えて18代目が細川護熙さんである。

さらに、この幽齊がなぜこれほど活躍できたのかという根拠の一つとして、幽齊は、第12代將軍足利義晴よしはるのご落胤であるという説もある。(会場どよめく！)

〔山名氏〕

山名家は、山名豊国とよこく(禪高ぜんこう)が中興の祖である。秀吉、家康に仕え、御伽衆おとぎしゆうとして、連歌や茶道など主に文化面で貢献し、特に家康との関係を強化した。むしろ武士を捨て、文化人として時の権と付き合ってきたといえる。応仁の乱以降は守護大名山名家も徐々に勢力が衰退し、豊国の代には、武より文、文化を大切にして、武家や町衆と付き合っていくという生きかたを選択したといえる。

〔司会〕

近代から現代へ両家はどうか守ってこられたのですか？

〔吉丸氏〕

細川家の約700年の歴史資料を守り、管理している「永青文庫」がある。永青の名前の由来は、頼有の菩提寺である建仁寺塔頭永源庵の永と、幽齊の居城青龍寺城の青を組み合わせたものである。細川家の16代がその名をつけて、今日まで守ってきた。

永青文庫には、美術品が6000点、未調査2000点、文書は93000点が所蔵されている。うち、応仁の乱の頃の文書が130点。信長から幽齊への文書などが59通。理事長の細川護熙さんは、最初は美術工芸品に関心があったようだが、最近は文書の方に非常に関心をもっておられ、私も一緒になってやっている。

〔山名氏〕

私たちは、「山名氏一族会」を35年前に立ち

上げた。山名にルーツを持つ関係者が、時空を超えて交流し、学び合い、励まし合っている。この趣旨で結成した。以来、毎年総会を開催し、歴史講演会や歴史探訪を行っています。会にはどなたでも入会できます。

結成時、全国の山名関係者に資料提供を呼び掛けましたが、残念ながら細川家のように多くは残っていません。

その中で、資料提供を受けたものは、兵庫県香美町にある山名の菩提寺の「法雲寺」に「山名蔵」を作って展示しています。甲冑、刀剣、古文書などいつでも見ていただける。

また、兵庫県の和田山に「竹田城」があります。上から見ると、虎が伏しているように見えますので、「虎臥城」ともいいます。但馬・播磨地方の領主であった山名宗全が普請した城で、「天空の城」として人気がある。「日本のマチュピチュ」ともいわれ、雲海に浮かぶ姿は、多くの観光客の人気スポットとなっていますのでぜひお越しいただきたい。日本の名城100選の人気上位にあり

ます。

(まとめ)

〔井上氏〕

応仁の乱から戦国時代にかけて、多くの大名が没落した。その中で、細川、山名両家は、見事に生き残ってきた。

細川家も、山名家も、武骨だけではなく、ともに文化を大切にしてきた。ここまで長く続く背景に文化があったのではないか。

応仁の乱の時代は、

確かに大破壊の時代だった。しかし、一方で残したものがあつた。これを忘れてはならない。この時代に、町衆、が生まれ、自力救済すなわち自分たちの力で、自分たちの町を作り守り、担ってい



(写真C) 満員のシンポジウム会場の様子

くという、そういう人々が、意識が育ってきたことも事実、それが今に続いている。

後世、今に続く様々な文化を形成する原点に応仁の乱がなっていることは紛れもない事実である。本日は意義あるお話を大変ありがとうございました。(大拍手)(写真C)

追記

「応仁の乱」勃発の地に、記念碑が建立！

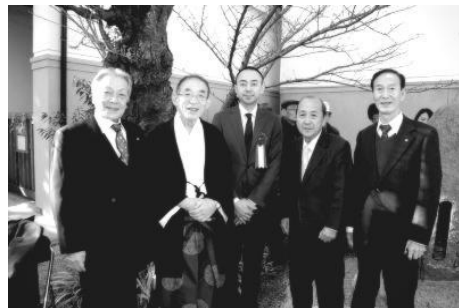
京都市上京区にある上御霊神社は、1467年の合戦勃発の地として知られているが、この度、記念碑の除幕式が行われました。(写真D・E)

東陣プロジェクトの細尾真生会長が中心となり、協力者の寄付をもとに建立されました。石碑には「応仁の乱発端 御陵合戦旧跡」と刻まれています。除幕式には、山名一族会を代表して、山名靖英理事長・山名年浩相談役・草山宏副理事長が出席しました。
(2017年12月2日)



(写真D)御陵合戦記念碑

2017年12月完成



(写真E)左から筆者山名靖英・御霊社宮司様・細川護光氏・山名年浩山名会前会長・草山宏山名会副理事長

西陣、そして東陣

― 東陣プロジェクトの活動 ―

応仁の乱東陣プロジェクト実行委員会 会長 細尾真生

私は西陣で生まれ西陣で育ち西陣で今も住んでいます。そのうえ仕事も西陣織を生業にしております。先祖は300年以上前から西陣織を織っていました。「西陣」は私のアイデンティティーそのものです。そして応仁の乱以降私の住んでいる地域が西陣と呼ばれるようになったことは、学校でも学びました。

「応仁の乱」は応仁元年（1467年）に発生し、文明9年（1477年）までの約11年におよんで継続した内乱。細川勝元と山名宗全の二大有力守護大名の対立を生み、幕府を細川勝元の東陣営、山名宗全の西陣営に分ける大乱となった。

ならば、山名宗全の西陣と細川勝元の東陣があったはず。なぜ西陣が有名になって、東陣は知ら

れていないのか？東陣を調べ、東陣の魅力を引き出し、西陣あつての東陣、東陣あつての西陣という関係性をつくれば、西陣と東陣を擁する、我々の行政区である上京区の魅力、そして延いては京都の魅力がもっともっと高まり、地域の更なる活性化に繋がるのでは。人のやらないことをやるのが好きな自分の性格と無名な東陣を西陣より有名にしてやろうという天邪鬼的な思いが深まり、この東陣プロジェクトに没頭していきました。この私の思いに、地元の歴史研究家や愛好家の方々、上京区長を始めとする行政の方々、京都市考古資料館の方々が共感し、応仁の乱東陣プロジェクト実行委員会が2015年に誕生したのです。

まずは、堀川、小川^{こかわ}から東に陣を張った東陣の

地域の調査、研究からスタートし、一般の方々が分かりやすく親しみやすい散策マップを作成し、2015年11月に京・上京探訪まち歩きツアー「東陣」を多くの参加者と共に実行しました。そしていよいよ翌年2月に新春特別歴史シンポジウム「応仁の乱―今輝け東陣を訪ねて―」を開催することになりました。場所は上京区総合庁舎4階大会議室。午後1時30分開始。定員180名先着順、申込不要。参加費無料。基調講演「応仁の乱と上京の史跡と遺跡」講師山本雅和氏（京都市考古資料館副館長）。パネルディスカッション、コーディネーター山本雅和氏、パネラー中谷香氏（上京区長）古武博司氏（国際文化政策研究教育学会員）豊田博一氏（上京探訪シナリオ研究会会長）。どれだけの人が集まるのだろうか？非常にマニアックなシンポジウムです。で100名集まれば良しとしなくては、と高を



「今輝け東陣を訪ねて」
の案内パンフレット

くくっていました。

準備の為に関係者は正午に集合、ということ。正午に会場に行ってみると、1時間30分前だといふのに200〜300人の聴衆がすでに来られていました。それから次々と聴衆が増え、1時間前にはほぼ満席。急遽あわてて関係者全員で椅子の数を250名まで増やしましたが焼け石に水。すぐに満席になり、会場に入られない人が、エレベーター前にあふれ、総合庁舎の一階ロビーにあふれ、総合庁舎の前の今出川通に長蛇の列ができるという事態になってしまいました。会場と総合庁舎が正に応仁の乱の状態でした。上京区役所の所員の方々にご来場いただいた方々に謝罪してもらい、会場に入れない多くの人にお引き取りいただき、大変なご迷惑をおかけするシンポジウムになりました。この様な事態になるとは予測しておりませんでした。が、「応仁の乱」に対する多くの方々の関心の深さ、東陣という聞いたこともないテーマに対する好奇心の強さを改めて体感させていただきました。

このシンポジウムを通して多くの方々の支持をいただいたことに我々は大いに元気づけられ、応仁の乱勃発550年になる翌年2017年に活動を繋げ加速していきました。応仁の乱によって京都はどの様に変わっていったのだろうか？応仁の乱は京都にとってどのような意味があったのだろうか？この問題意識を国宝上杉本洛中洛外図屏風を通して考えてみるシンポジウム「洛中洛外図屏風に見る乱後の東陣」と特別対談「応仁の乱550年目を迎えて」を企画しました。

2017年1月、国宝上杉洛中洛外図屏風の雪に埋もれた山形県米沢市を当時の上京区長中谷香氏と訪れ、米沢市長と関係者の方々に洛中洛外図屏風の複製パネル製作への協力を依頼しました。そして2月26日、新春歴史シンポジウム第2弾「応仁の乱勃発550年 洛中洛外図屏風に見る乱後の東陣」を、今回は定員300名申込制で再び上京総合庁舎4階大会議室で開催しました。定員300名に対して800名以上の申し込みがあり、人々の関心の高さに勇気づけられました。

山本雅和氏（京都市考古資料館副館長）による「洛中洛外図に見る上京」というテーマの講演会を行いました。洛中洛外図屏風には室町殿、細川殿、近衛殿、誓願寺、上御霊社など東陣地域の描写が多く、西陣地域は千本釈迦堂、千本閻魔堂ぐらいでほとんどが金色の雲で隠されているという描写です。東陣地域は幕府や為政者による建物を中心に描かれておりますが、西陣地域の描写からは、金色の雲の下で西陣織の職人と多くの庶民がたくましく働き、生活している姿が伺えます。金色の雲の下で生活し働く多くの人々の地域への愛着が西陣という名を残し広めていったのではないかと想像できます。

この年2017年の5月21日、「東陣ゆかりの地」説明版の除幕式、国宝上杉本洛中洛外図屏風の複製パネルのお披露目の展示、そして、山名靖英氏（全国山名氏一族会理事長）と吉丸良治氏（熊本県文化協会会長、（公財）永青文庫常務理事）をお迎えしての特別対談「応仁の乱550年目を迎えて」を開催しました。応仁の乱550年

の節目で、西軍
大將山名氏の末
裔と東軍大將細
川氏ゆかりの方
お二人に戦いで
はなく対談をし
ていただき、手打ちをしていただくという目論見
でした。



「応仁の乱550年目を迎えて」の案内パンフレット

東軍大將細川勝元の邸宅、細川殿のすぐ近くの小川児童公園に東陣プロジェクト実行委員会が初めて「東陣ゆかりの地」として説明板を設置し、その除幕式を賑々しく朝から行いました。この説明板は東陣プロジェクトのシンボルにもなっています。

上京区総合庁舎2階ロビーでは4カ月かけてつくりあげた国宝上杉本洛中洛外図屏風の複製パネルの披露を行いました。上京区役所が保管する上京区の文化の宝物が増えました。

この日の午後2時からいよいよ山名靖英氏と吉丸良治氏による対談「応仁の乱550年目を迎え

て」が始まり、京都市歴史資料館館長の井上満郎氏のコーディネートによって秘話や両家のその後についてなど多彩な話題で盛り上がり、200名の聴衆が対談に魅了されました。応仁の乱後も両家共長く家名を保ったのは文化の力であったという話には説得力があり、550年の歳月を経て山名氏と吉丸氏が握手を交わして和睦し、対談は大いに盛り上がりました。

応仁の乱550年目の2017年はこれで終わらず、12月にもう一つ大きなプロジェクトが行われました。応仁の乱勃発の地である御霊神社の境内に記念碑と二つ目の説明板を建立したのです。石碑は能勢黒石の自然石で高さ160センチ、幅90センチ、東軍ゆかりの肥後細川家第18代当

主の細川護熙氏の揮毫による「応仁の乱発端 御霊合戦旧跡」の文字、裏には寄



「山名細川の対談」を報じた京都新聞の紙面

付をしていただいた259名のお名前を刻ませていただきました。御霊神社の小栗栖元徳宮司、細川護熙氏の長男護光氏、そして山名靖英氏、門川大作京都市長に除幕していただきました。東陣プロジェクト実行委員会の歴史に残る除幕式でした。

2019年5月11日、上京区140周年記念事業としてシンポジウム「応仁の乱後の上町かみのまち下町しもまち」を開催しました。応仁の乱は、荒廃した

京都で自衛に動いた町衆のパワーが台頭する契機にもなり、上町（上京区）下町（下京区）それぞれ堀と土塁を築いて自衛体制をとり、町衆が自立して自主的に自治を行っていくという現在の自治活動に繋がる礎となりました。上町の民衆は革堂こうどうに集まって自治活動を行い、下町の民衆は六角堂に集まって自治活動を行いました。そして上町、下町が助け合いながら京都の繁栄を支えたのです。京都市埋蔵文化財研究所の山本雅和氏に基調講演をしていただき、その後、上町の代表として武者小路千家家元の千宗守氏、下町の代表として華道家元池坊次期家元の池坊専好氏に出演いただき、

同志社女子大学教授の山田邦和氏のコーディネートで対談していただきました。対談後、豊臣秀吉の時代の京都を舞台にした池坊専好の物語「花戦さ」を上映し、応仁の乱後の京都の町衆のたくましい生き様に触れていただきました。

この日の朝には三つ目の説明板を武者小路千家の近くに設置し、小川沿いに並んでいた百万遍、革堂（行願寺）、誓願寺の説明をご覧いただくことが出来る様になりました。上町の拠点革堂を中心に東陣の地域の魅力をさらに引き出せたと思います。

2021年はコロナウィルスの問題でかなり活動が制限された年でした。定員を30名に制限し、シンポジウムの動画を後日インターネッ



「御霊合戦旧跡碑」の除幕式。
左から5人目山名理事長、7人目京都市長、
8人目細川氏、右端が筆者

トで配信するようにし、7月4日に歴史シンポジウム「応仁の乱後の御所文化―上の町と御所―」をいつもの上京区総合庁舎4階会議室で開催しました。基調講演「遺跡からたどる御所文化」を京都市考古資料館館長の山本雅和氏にお願いし、その後、「応仁の乱後の御所文化」をテーマに冷泉貴実子氏（冷泉家時雨亭文庫常務理事）と山科言親氏（衣紋道山科流30代家元後嗣）の公家のお二人に山本雅和氏のコーディネートで対談していただきました。応仁の乱が始まり京都の公家達は様々な地方に様々な縁を頼って避難疎開し、それが様々な地方に京都の御所文化が広がることになりました。但し、山科家は天皇様の衣と食を担当していたため天皇様の近くから離れることが出来ず苦労したというエピソードもご披露いただきました。応仁の乱の時、天皇様や公家の方々はどの様にしていたのか、どの様な状況だったのか、という素朴な疑問から始まったシンポジウムでしたが、しっかりと答えていただいた内容でした。

その他、2017年には「語り部と歩く120

0年連続講座」を6回開催し、2015年から8年間様々な活動を実施してきました。そして多くの方々に積極的に参加していただき、関わっていただいた東陣プロジェクトでした。我々の好奇心は益々拡がり、今年2023年8月には歴史シンポジウム「鎌倉時代の上の町 上京のはじまり」を開催する予定です。武家社会が始まった鎌倉時代の京都はそして上の町はどの様な状況だったのか。鎌倉時代の京都の歴史はあまり知られていないので、ここを深掘しようと考えています。そして鎌倉時代から足利氏の室町時代にどの様に繋がり、京都の町は、上の町はどの様に変遷していったのか。興味はつきません。

門川京都市長からは、応仁の乱は11年続いたのだから、東陣プロジェクトも11年は続けてください、といわれています。応仁の乱は京都の、そして日本の大きな歴史の大転換となった出来事です。この応仁の乱を切り口に日本と京都の歴史をさらに学び、社会がそして人々の生活がどの様に変わっていったのかを学び続けたいと思います。



「御霊合戦旧跡」碑と「応仁の乱発端の地」説明看板
(2017年12月完成)

ほそおまさお
細尾真生氏プロフィール

1953年 京都市生まれ。

1975年 同志社大学経済学部卒業後、伊藤忠商事

(株)入社。

1978年 イタリア・ミラノのノートンズ社出向。

1982年 帰国後(株)細尾入社(家業の西陣織に携わる)

2000年 (株)細尾 代表取締役社長に就任。

2011年 西陣織の技術と素材を活用した広幅織物

製造輸出事業を本格的に展開。

2015年 応仁の乱東陣プロジェクトを始める。

2021年 (株)細尾 代表取締役会長に就任。

1000年前の貴族の色を再現する古代染色研究所を開所。

伝統産業からクリエイティブ産業への業態変革に挑戦している。

(一社)

京都経済同友会常任幹事

京都先端科学大学特任教授

豊国の国入りと打揚駕籠を許された山名家

郷土史家 古川哲男

国入りをしていた豊国公

村岡山名家初代豊国（出家後禪高）と二代豊政は国入りしていないと伝えられていましたが、豊国が国入りしていた記録が見つかりました。

記録が残されていた家は、香美町小代区の旧家田渕家で、先祖は但馬守護出石山名家の家臣で、丸に三ツ引き紋を賜り、鶴ヶ峯城の垣屋家に仕えたり、大坂城攻めに加わった人もおり、豊国が七美郡を賜った時小代庄の代官を仰せ付けられたと「先祖伝書之覚」に書かれている。

陣屋が七美郡福岡に置かれていた当時、豊国が国入りをして能楽のうがくを催し、田渕嘉右衛門

も招かれて十二面の能面を賜ったが、三代矩豊が村岡に陣屋を移して国入りをした寛永二〇年（一六四三）に、豊国から賜った能面の内七面を田渕嘉兵衛が矩豊に差し上げた、と記録されているが現在田渕家に残されている能面は一面だけである。

なお、山名家の家紋は現在丸にニツ引きであるが、山名の一族同志が戦った明徳の乱



豊国から拝領した能面

(明徳二年・一三九一)までは丸に三ツ引きであったが、戦乱後三ツ引きは散々に通ずるとしてニツ引きに改めた。

また、五七の桐紋も家紋であったが、明徳の乱は山名一族が争って、敵味方共同の家紋の旗印で紛らわしいので、但馬守護の師義側は、五七の桐紋の蟬本(旗竿の上部)に笹の葉を結び付けて戦い、その後五七の桐に七葉笹に改めた。

打揚駕籠を許された山名家

康永五年(一七七六)二月幕府は、乗物のうち打揚腰綱代・打揚・打揚か腰綱代のいずれか、腰綱代を許された大名など三四人にこれを許し、他はこれの使用を禁止した。

打揚とは、引戸の代わりに簾が垂れ下がった乗物で、引戸より格が上とされていた。

腰綱代とは、乗物の下の部分が桧の薄板を編んで貼ったもので、ちなみに、将軍家と紀

州家は溜塗惣綱代であずき色の乗物、尾張・水戸家は打揚腰綱代であった。

これが許された家々は、徳川家と近世姻戚関係が有った前田・池田など有力大名か、戦国時代以来の由緒ある島津・伊達・細川・毛利・佐村・上杉などと、ご三家その分家の嫡嗣や弟も許されている。

他に、旗本で許された家は二家だけで、喜連川家と山名家だけであった。

喜連川家は室町時代の関東公方足利の系譜を持っているし、山名家は室町時代の名門である。

喜連川家と山名家の交流もあり、村岡山名家六代豊就の正室は三池立花家家生まれであるが、喜連川家の養女になり、豊就に嫁いでいる。

なお、但馬・丹波・丹後の大名や旗本で、打揚駕籠が許されたのは、山名家だけであった。

健康寿命について

書き人知らず

最近、ガンで亡くなる人が多いが、1920年から1930年頃にかけて、ドイツのフォン・ワールブルクが、研究してきたガンについて発表し、ガン細胞はエネルギーとして、ブドウ糖しか使うことができない、と発表したのです。故に、人間がガンの食糧、つまりブドウ糖を食べなければ、ガンは兵糧攻めにあって死滅してしまう、と提言し、ノーベル医学賞を受賞しました。これは人間なら、エネルギーとしてケント体、つまりβ（ベータ）ヒドロキシ酪酸^{さん}を使って生きることができなのです。なぜなら、人類700万年の内、699万年をケント体ですごし、やっと1万年ほど前に小麦や米といった炭水化物系のエネルギーに移ったものと考えられます。ですから人間の体の不調は、ほとんどが、この炭水化物をエネルギーとする事から起因するのです。端的に言えば、本当の栄養素は蛋白質と脂肪だけであり、炭水化物は、車でいえばガソリンのようなエネルギーを発する消耗品に過ぎないのです。

さて、日本の食品には発ガン物質を含む、つまり

毒を含んでいる物が多いのが難点です。タバコ、酒は言わずもがな、終末糖化物質の、AGE（アドバースト・グリケイション・エンド・プロダクト）があります。あるいは、亜硝酸塩を含む肉からニトロソアミンという発ガン物質が出きますし、肉はただ焼くだけで、ヘテロ・サイクリックアミンという猛毒に変わります。また別に、2015年に米国ガン研究機関が発表したアクリル・アミドは、発ガン物質で、ジャガイモの中にアミノ酸の一種であるアスパラギンとブドウ糖が含まれていますが、この両者を高温加熱すると、超悪玉の発ガン物質となります。サツマイモも同様です。ただ前述のヘテロサイクリックアミンに関しましては、世界のガン研究基金では、週に500g未満の肉であれば、大丈夫としています。

さて、ガンを撃退する免疫細胞はキラーT細胞ですが、食物の中にもガンと戦う野菜や果実あるいはナッツなどがあります。列挙しますと、キャベツ、ニンニク、大豆、わさび、しょうが、とうがらし、

たまねぎ、柑橘類、亜麻、ごま、トマト、ナス、ブロッコリー・スプライト、カシューナッツ等です。バナナはちよつと変わっていますが、これもガンを予防してくれます。しくみはバナナの中の糖が腐ったような黒色に変わりますが、これは腐っているのではなくトリプトファンに変わったのです。そしてトリプトファンはセロトニンを作り、セロトニンがガンと戦うのです。

話変わって認知症に移りましょう。お年寄りだけの事かと言うと、そうでもなく、結論を先に言えば、どれだけ小麦を食べたかの問題です。小麦を食べると、小麦に含まれる蛋白質のグルテンはゾヌリンの分泌を促し、これが脳血管の血流脳関門を開き、アミロイド β （ベータ）が脳内に入り溜まるとアルツハイマー型認知症を発症します。しかしアミロイド β は血管内にも溜まりますので脳梗塞の危険性もあります。又、パンを食べる事はグルテンが腸を傷つけて腸管侵漏^{しんろう}を起し、リーキーガットとなる。これは腸の粘膜に穴を開け、毒素や菌やウイルスが血管内に漏れ出すことです。ですから体調不良の原因は小麦のグルテンにあるのです。

さて、牛乳の話に移ります。牛乳100ml（ミリリットル・CC）には110mg（ミリグラム）のカ

ルシウムが含まれていますが、マグネシウムは、わずか10mgしか含まれていません。こうなるとマグネシウムよりカルシウムが圧倒的に多く、過剰なカルシウムが体内で異常をきたすようになります。

スポック博士は1998年に自書の改訂を行い、「最悪の食品は牛乳や乳酸製品である。人間も他の動物と同様に離乳期をすぎたならば、ミルクを飲まない事が正しいのである、と書き直しました。なぜかと言うと、ミネラルのバランスはマグネシウムを頂点として、次いでカルシウム、その下がリンなのです。この順序が逆になると、人間の細胞を狂わせる殺人的な猛毒となります。たとえば、カルシウムはマグネシウムが足りなくなれば、言いかえると、マグネシウムより多くなると血管などに付着し、石灰化を起こす「毒」となります。同様にリンがカルシウムより多いと、リン酸カルシウムとなって、これも血管内に蓄積します。どういふ事かと言いますと、一細胞の中にカルシウムが一個あるとすると、マグネシウムは一万倍なければならぬのです。そんな細胞が人間には60兆もあるのです。

ですから。これらが過剰に血管にたまると、血管がボロボロになり、心筋梗塞や脳梗塞になります。どんな肉でもリンはカルシウムの10倍ぐらいあ

ります。それだけではありません。どんな食品にリンが含まれているかと言いますと、加工肉や加工食品、つまり、総菜や弁当、サンドイッチ、これらは結着剤や、膨張剤、防腐剤、pH（ペーハー）調整剤、乳化剤、調味料、香料等として「リン酸塩」「リン酸塩ナトリウム」と表記されるリンが含まれる食品です。これらは2015年オーストラリアのデイーキン大学の教授達が、「ジャンクフードの摂取によって、脳の海馬が縮小する」というショッキングな研究を発表しました。海馬は記憶や学習に関わっているだけでなく、脳の中で、成人になってからも新しい神経細胞を作る唯一の領域だからです。

さて、トランス脂肪酸の話をししましょう。その前に良い脂肪酸はオメガ3、すなわちアルファ・リノレイン酸ですが、これはアマニ油かエゴマ油です。ところが、この両者は油ですから大量に食べると、脾臓が悲鳴をあげて線維化し、ついにはガン化します。また、両者は酸化しやすく、猛毒となりますから、空気や光や高温に接しないように注意しなければなりません。又、脾臓はトウガラシやコショウやシウウガに弱く、脾液が自分の内臓を溶かしてガン化します。

閑話休題、トランス脂肪酸にもどりましょう。こ

れは植物油（ほとんどは大豆油です）などを製造する過程で生じる脂肪酸です。トランス脂肪酸は動脈硬化をものすごく進めます。ファストフードに多く含まれ、その代表格はショートニングです。これは植物油を原料としたクリーム状の食用油脂です。有名なのはマーガリン、クリーム、コーヒーフレッシュ、カレーのルウ等です。ハーバード大学では、トランス脂肪酸こそが心疾患の原因となると結論づけ、アメリカでは2018年から製造も販売も禁止されています。サラダ油や大豆油は食べてはいけません。特にサラダ油は製造工程で、ヘキサンという化学物質を使いますが、これは神経系を侵す猛毒です。ただヘキサンは最後には揮発して無くなると言われていますが、本当は微量ながら残存するのです。それが危険なのです。

最後になりましたが、健康寿命の秘訣をお伝えします。これは京都大学の健康長寿学科の某教授の説ですが、テロメアを長く伸ばして寿命を延命するところが出る。と言うものです。

ではテロメアとは何かといいますと、人間の細胞の核にある染色体の末端に在って、細胞が一回細胞分裂を起こすと、一段短くなります。いわば寿命の番人です。昔は一細胞が60回細胞分裂を起こすと、

テロメアは、自分の細胞に自然死（アポトーシス）を命じ、その細胞は死ぬと言われていました。もし死ななかったら、テロメアの居ない細胞は無限に分裂を繰り返します。これがガンの正体ですが、最近では数百回分裂することができると言われています。ただ、テロメアの短い人は、物事をネガティブに考え、ストレスが多いからです。つまり短くなるスピードが速いのです。危険なネガティブ思想、つまり、まだ起きていないのに悲観的な不安を感じるとストレスとなり、テロメアの長さに悪影響を与えるのです。テロメアの長さが短くなると寿命が短くなるのです。将来への不安、とりこし苦労、これらが原因で寿命の長短となるのですから、寿命を長くする方法があるのです。

それはマインドフルネス革命と呼ばれていて、不安を振り払い、ストレスを少なくする方法です。具体的に言いますと、自分の呼吸を聞く、というか、吸って吐いて、呼吸に注意を集中するのです。大きく深呼吸して、一旦止めて、ゆっくり吐くのです。無心になって、只、今、現在の息づかいに集注するのです。他の事は何も考えない事です。交感神経が優位だとストレスが多く、副交感神経が優位だとストレスは少ない。老化防止の為には毎日マインドフ

ルネスを行う事です。カリフォルニア大学・ロサンゼルス校の、ラブレッキ―博士はマインドフルネスこそが長寿の秘訣だと言っています。ただ博士は、テロメアを長くする蛋白質は未だ発見されていないが、必ず在るはずだ、と予言しています。

さて、最後に、南雲^{なぐも}医師の重大な忠告をご紹介します。

それは、飢えに耐え忍ぶ生命力を発揮すること。これで、成長ホルモン（長寿ホルモンとも言う）、サーチュイン遺伝子（長寿遺伝子とも言う）、そしてアディポネクチンが活性化します。

胃が空っぽになりお腹が「グーッ」と鳴ると、グレリンというホルモンが分泌され、それが長寿ホルモンの分泌を促進させ、内臓脂肪を燃焼させます。次に活性化するのが、サーチュイン遺伝子です。これはMIT（マサチューセッツ工科大学）のガレンテ教授が99年に発見したものです。寿命が1・5倍まで延ばされます。そしてアディポネクチンが若返りの真打ちとして登場し、傷ついた血管を修復して回ります。

さあ、皆さん、若返って長生きして下さい。

了

義理流―田渕氏の系譜

吉川廣隆（山名会事務局）

訪問者

数年前の6月の事、山名蔵に先祖の発祥たずねて隣町の方がお見えになった。

その方曰く、「山名某の側室の子が先祖だと伝え聞いている。詳しいことを知りたくてお邪魔した。」と仰る。お名前を聞くと「田渕」と言われる。

田渕姓はこの辺りでは良く聞く名字で、法雲寺の檀家の中にも2、3件田渕姓がある。私の高校の同学年には少なくとも10人以上の「田渕君・田渕さん」が居たように思える。それ程この辺りでは普通以上の良く聞く名字である。

その田渕の祖が「山名某の側室の子」と言うのは初耳で、俄には合点がいかない。その方は、

「今日は下見で、後日改めて同族4、5人で出直す」と言われ、その日は短時間で帰られた。

今まで山名に関連した姓に田渕姓も含まれるという話は聞いたことが無く、老僧に聞いて見ても同じく。そもそも、その方が言うように「側室の子」で有ったとしても、せっかく出来た跡継ぎの姓を山名から他の姓に変える理由が分からない。それにいったい「山名某」とは誰なのか、時代は江戸時代のことか、それ以前のことか、疑問が残る。

思い違いでは？

ひょっとして何か他氏と勘違いされているのでは？例えば、表米王を祖とする但馬の日下部氏は末裔が枝分かれして太田垣・八木・朝倉・田公等

へと分かれて行った。その流れの中で、田渕姓も形作られ、それを山名氏発祥と勘違いされているのかも？と思いつつ、次回その方達がお越しになった際に参考になることは無いかと『七美郡誌』を開いてみた。

『七美郡誌』は、江戸後期から明治時代にかけて旧村岡藩内で医師をしていた八木玄蕃が著した書物で、明治時代に入り急速な時代の変化によって、姿を消していく明治以前の記憶を留めようとして、藩内にあった各種組織や遺構や社寺、重要な出来事、各集落の成り立ちや、地域に伝わる言い伝え、加えて主要な氏の経歴や、関係名簿までも網羅した記録で、昔のことを調べようと思うと、私の場合、先ずこの本を最初に開く。

訪ねてこられた方は、当地村岡から10キロほど離れた養父市関宮町（旧・七美郡熊次郷）丹戸の田渕さんであったので、丹戸村の頁を開き田渕姓に関連する事項が無いか見てみると、下記のようなことが記してあった。

羽柴軍の但馬因幡侵攻の頃の話、但馬山名の家臣で、当地方を治めていた田公氏が因幡に傾出した後に、田公残党が藤堂高虎を相手にし「小代一揆」を起こす。その一揆の首謀者を太田垣信喬と田渕清理という。この一党はしばしば小代郷から丹戸周辺まで出陣しては結構暴れ回り、特に田渕清理は鉢伏高原で弓矢を引いて矢の落ちたところまでを自分の領地とするなど言って威勢を張ったが、羽柴軍の但馬平定以降は本拠地である小代郷新屋へと大人しく帰って行った。

という記述がある。

この中に登場する「太田垣信喬」とは、竹田城主の太田垣土佐守輝信（延）の次男で、竹田城落城前後、小代郷城山城主の田公を頼って小代郷に移っている。（確かに小代には太田垣姓が今も残っている）

その太田垣と共に一揆の首謀者に名を連ねる田渕清理も太田垣に並ぶ求心力を備えた人物と見えるが、田渕氏についての詳しい記述は見えない。

では、田渕が本拠地としていた香美町小代区（旧・七美郡小代郷）新屋村の頁を開いてみると「田渕清理」で一項が設けてある。そこを讀んでみると、今まで気づきもしなかった事柄が記してあった。

田渕庄五郎清理という者あり、祖先は山名右京大夫時氏公四男、紀州海士郡大野城主山名修理大夫義理の四代美作大庭郡高田城主兵部少輔政清。

と記してある。

小坂博之著『山名豊国』の巻末系図を見ると確かに、義理公の末裔に「政清」の名が見える。

その後を読み進めると、

…（略）…その子、与五郎豊清…（略）…

その子、庄五郎清理…

とその後の系譜が記してある。

政清は美作30万石の領主なのだが、西方から勢力を拡げてきた大内義隆に抗しきれず、豊清の代に美作市（旧・作東町）田渕に移り、土地の名を取って田渕氏と姓を改めた。子の清理は、美作

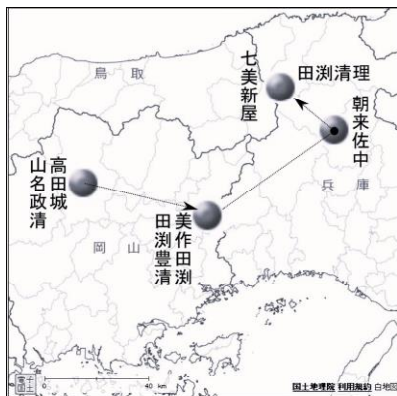
田渕から但馬山名配下で竹田城近くの朝来郡佐中へ移り、更に田公能登守綱典（『七美郡誌』では沢庵和尚の父としている。）を頼って七美郡小代郷へと移ったと書いてある。系図に表すと図②の如くとなる。

これが事実であるならば、当地周

辺に散在する田渕姓は間違いなく、山名時氏公—義理公—政清公の流れを受け継ぐ山名一族の一員と言える。

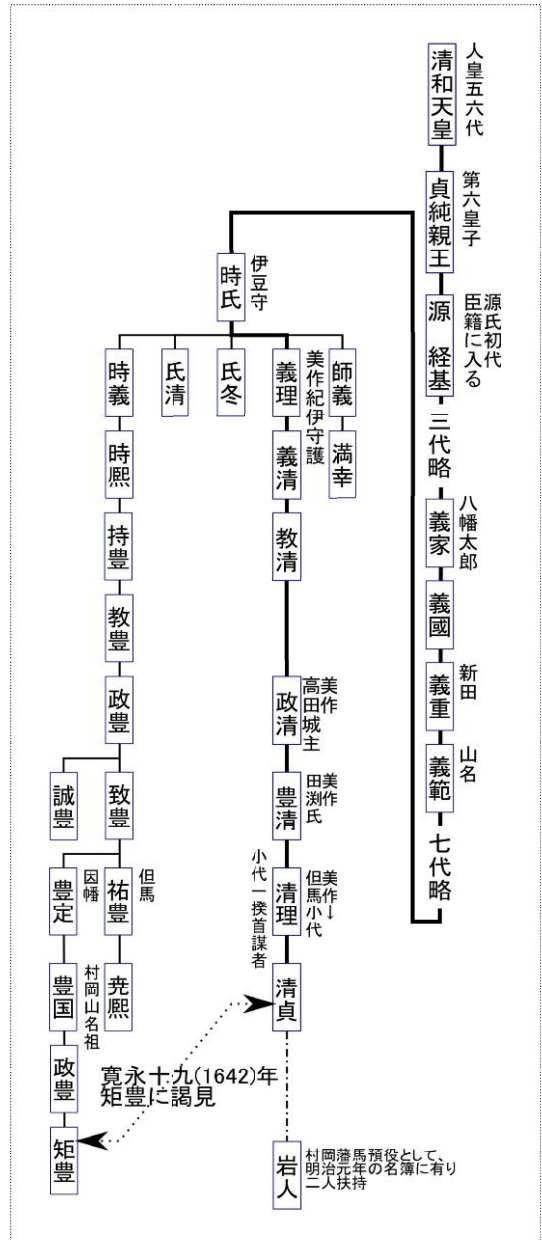
この田渕姓の本拠地を小代郷新屋

と言ったが、前述の熊次郷丹戸とはスキー場のある鉢伏山を挟んで北（新屋）と南（丹戸）に、直線距離で5kmほどの所に位置する。私自身の感覚としてもこの地方の田渕姓は、この鉢伏山を中心



図①、田渕氏の一派が辿った経路

図②、田渕氏略系図



とした地域に広がっている。(確かにスキー場に行く回数多くの田渕さんにお目にかかる。)

美作から移り、この地に根を下ろして400年以上、人々と共に鉢伏山を切り開きながら子孫も周囲へと枝分かれして今に至ると想像する。

気がつかないもので

日頃から、『七美郡誌』を頼りにしながらも、どちらかと言えば調べごとに関連する部分のみをつまみ食いをするだけで、こんなに身近にしかも沢山の山名由来の「田渕氏」に囲まれた過ごしていたとは・・・全く気が付かなかった。『七美郡

誌』を一度でも通して読んでいればもつと早くに気が付いていたかも知れないと悔やまれる。

少なくとも、この本が刊行された明治後半には著者やその頃の田淵姓の方々は「元々は山名」と認識されていただろうが、果たして今の時代にどれほどの田淵さんが、このことを意識されているのだろうか？

どの姓に関わらず途中で一度途切れてしまった一族の記憶を取り戻すのは、困難な事と思える。とは言え、こんな大切なことに気付かせてくれた丹戸の田淵さんには唯々感謝である。

さて、この近辺に居られる多くの田淵さんや、美作にルーツを持つ田淵さんには「元々は山名」と思い起こして頂いた上で、「是非、山名会に入会を」と勧めるには、どのようなアプローチが良いか？一つ重要な課題を頂いたような気がする。

（会員諸氏の身近でも「元は山名」という家系があるかと思いますが、ご存じの際は是非事務局へご一報お願い致します。）

参考・八木玄蕃著「七美郡誌稿」（明治39年刊）P150・「丹戸村」より

○丹戸村 按スルニ七味叢誌山名家ノ記録及ヒ古老ノ口碑ニヨレハ奈良尾村ノ支村ト雖トモ舊村ナリ

中古天正五年⁽⁴⁾ 丑十月八木落城後小代一揆ノ黨太田垣田淵等折々當村ニ出張シ田淵庄五郎清理弓ヲ引矢ノ止ル所迄ハ自分ノ支配地ナリト強言ヲ吐キ押領シケレドモ乱レタル時ナレハ抗スル者ナカリケリ全八年⁽⁵⁾ 辰六月羽柴殿御入國後田淵モ新屋村ニ閑居シ一揆モ止ヌ今二子孫アリ

同 P192・「新屋村」より

一村ニ田淵庄五郎清貞ト云者在リ先ハ山名京兆時氏四男紀州海士郡大野城主山名修理大夫義理四代作州大庭郡高田城主兵部少輔政清卅萬石余ヲ領スト雖モ大内義隆ニ攻ラレ永正⁽¹⁾年中ニ至リ不振其子與四郎豊清永正⁽¹⁾年

中作州葦多郡田淵ニ移リ故ニ以テ氏トス其子
 庄五郎清理享祿⁽²⁾年中但州朝来郡佐中ニ來
 リ又天文⁽³⁾年中七味郡小代庄ニ來リ田公能
 登守綱典ニ從ヒ天正五年⁽⁴⁾丑十月綱典入道
 秋庭城山ヲ退城セラレ其後太田垣権兵衛信喬
 ト共ニ小代一揆ノ張本トナリ清理後ニハ熊次
 庄丹戸村ニ出張シ弓矢ヲ以テ谷中向フ者ハ討
 取シカハ抗スル者ナシ天正八年⁽⁵⁾羽柴氏入
 國後ハ清理モ新屋ニ流寓シ其子庄五郎清貞寛
 永十九年⁽⁶⁾壬午六月十五日山名豆州公ニ謁
 シ代々苗字御免目見列トナリ其後連綿トシテ
 當主庄五郎ニ至ルト云全氏與右衛門ト云者寛
 永年中ヨリ領主及家中十三戸二年玉ニ枋餅黒
 豆一升宛ヲ献上シ來リシ例アリ

- (1) 永正年間 (西曆1504) 21
- (2) 享祿年間 (西曆1528) 32
- (3) 天文年間 (西曆1532) 55
- (4) 天正五年 (西曆1577)
- (5) 天正八年 (西曆1580)
- (6) 寛永十九年 (西曆1642)



図③、新屋・丹戸位置関係

豊臣期の山名禪高（豊国）

鳥取市歴史博物館 石井伸宏（学芸員）

はじめに

山名氏は上野国山名郷を本領としていたが、南北朝期に山陰地方を中心に西国に領土を広げた。その後、紆余曲折を経て但馬、因幡、伯耆の三ヶ国の守護職を本領的な所領として獲得し、また幕府の中枢においても侍所所司（長官）や宿老として重きをなした。

山名氏が西軍の大將となり戦乱の中心となった応仁の乱後、山名氏は將軍に参仕しつつも、領国では次第に勢力を落としていった。そして戦国時代には中国地方で勢力を広げる尼子氏や毛利氏、近畿地方で急速に勢力を拡大する織田氏の間にあって、山名氏の領国であった伯耆、因幡、但馬は

周辺の強大な勢力間の境目となっていた。

その様な状況下で、山名禪高（1）は山名氏が周辺の勢力に圧されつつある斜陽期に、但馬山名家から因幡に守護として送り込まれた豊定の子として天文十七年（一五四八）に生まれた。

禪高の生涯については小坂博之が詳細に論じている（2）。小坂は禪高の生涯を前半と後半で大きく分けている。小坂によると羽柴秀吉による天正八・九年（一五八〇・八一）の鳥取城攻めを契機に領国を失うまでを「最後の守護」としての前半生とする。そして織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らによって天下統一が進む中で、天下人に近侍して過ごし、最終的に村岡に所領を得て生涯を閉じるまでを「中世文化の伝達者」として生きた後半

生としている(3.)。

前述の書の中で小坂は禅高の生涯について当該期の文書や古典籍を中心に丹念に論じており、特に前半生の部分については因幡地方の戦国史としても価値が高い。

後半生については文人としての活躍を中心に、残されている連歌や古典籍に記された逸話から禅高の人となりも含めた実像に焦点をあて、最終的に但馬国七美郡に所領を得て寛永三年(一六二六)に死去するまでのことがまとめられている。

後半生については、天正九年以降の禅高の動向がわかる史料があまり多くはないものの、文化人としての側面とわずかに登場する政治上の逸話の史料を中心に、禅高の生涯において重要な転機を踏まえて語られている。本書はまさに史料に基づき禅高の人物伝となっている。そこで、本論では禅高の後半生、とりわけ天正九年に所領を失った後の禅高について、小坂が概略を論じられている部分を踏まえつつ、もう少し史料から豊臣期の禅高について掘り下げてみたい。

一 天正九年鳥取城攻め直後の禅高

山名禅高の人生にとって大きな転機は、小坂が指摘している通り天正八・九年(一五八〇・八一)の鳥取城攻めであろう。禅高は天正八年の一回目の羽柴秀吉の侵攻の際に毛利方の武将として鳥取城で戦い、籠城戦の末に降伏した。しかし、禅高の降伏により織田方に圧されていた吉川元春が再び因幡への影響力を取り戻すと、毛利方への復帰を望む中村春統、森下道誉をはじめとする因幡の国人たちと対立した豊国は鳥取城を出て秀吉の陣中に向かったとされる。この時これに喜んだ秀吉は禅高の処遇について、禅高を粗略に扱わず、「御居城(鳥取城)」や但馬山名氏の所領であった但馬国出石郡の支配を約束したとされる(4.)。なお、禅高は鳥取城を失うこの年に出家したとされている。

しかし天正九年の鳥取城攻めの後には宮部継潤が鳥取城に入った。禅高は因幡に戻ることもなく、また出石郡も与えられることもなく約束はすべて

反故にされている。この後の禪高の足跡は史料には見えず、「家譜」でも多田庄滞在中のことには特に触れていない。ただし、後述する「言経卿記」には、天正十四年（一五八六）の記事において禪高の注記に「因州」や「因幡国」との記載があり（5）、実態はなくとも因幡守護として何らかの立場が保持されていたことを思わせる記載も残っている。「家譜」によると禪高は天正十四年に徳川家康に拝謁するために上洛したとしている（6）。この時、但馬山名氏の直系である堯熙も家康との対面を願っていたが禪高だけが対面を許されたとする。

これまで多田庄で隠棲していた禪高が何故この年に出てくることになったのかについては、豊臣秀吉の動向が関係していると思われる。秀吉は天正十三年三月に正二位内大臣に叙任され、次いで七月に関白宣下を受け、名実共に武家の頂点に立った。そして、その頃から秀吉は織田信長の時代との違いを強調し、自らへの服属を強く求める姿勢を明確にしていく（7）。それより以前に禪高は

鳥取城を退去後、秀吉の誘いを断つたとされる。

「家譜」には禪高が秀吉から被官になることを求められたが、これを断つて摂津国多田庄に身を寄せたという（8）。このやりとりについては他の史料からは確認できないが、鳥取城攻めに際して禪高が戦略に口入れをしているという史料があること（9）、また但馬国の垣屋氏のように秀吉は平定した土地の者を召し抱えることなどを踏まえると（10）、少なくとも中国地方を進軍していくにあたって信長、秀吉に利用価値があると判断され、秀吉に帯同を求められた可能性はあるものの、禪高はそれを断り出家して下野したのであろう。しかし、秀吉が天下統一に向かう中で改めて出仕を命じられ、それに応じたのが天正十三年～十四年のことだったと考えられる。

かくして、禪高は鳥取城攻め後に望んでいたであろうものとは全く違う形で再び中央政権に身を寄せることとなったのである。

二 豊臣期の山名禪高と家康

天正十四年（一五八六）以降に禪高が京都に滞在していたことは禪高と交流のあった山科言経の日記から確認できる。禪高は天正十四年正月五日に豊臣秀吉の御伽衆・大村由己の邸宅で開催された和歌会始に初めて参加している（11）、これ以降、洛中で行われる連歌や和歌の集まりに度々登場している。前述したとおり禪高は秀吉に仕えることを拒否している史料が残っているが、この頃には秀吉に昵近することを決めて上洛したのであらう。

禪高は京都に滞在してしばらくは武家や公家の文化人と交流を重ねていたようだが、文禄二年（一五九三）になると禪高の生活に変化が訪れる。同年閏九月二十一日に江戸亜相（徳川家康）の下に柳原淳光、浅野長政（長吉）らと共に向かっている（12）。家康は文禄元年に始まった壬辰戦争（文禄・慶長の役）において肥前・名護屋城に在陣を命じられ、朝鮮半島には渡っていないが肥前

と畿内を往復している。この時も閏九月十三日に伏見に入っており、二十二日に秀吉と伏見城で茶会を行った（13）。禪高はその前日に家康の下に趣いて、秀吉の昵近衆として家康の接待のために参上したものと思われる。この日は夕食に相伴した後、囲碁を行ったという。

この日を境にして禪高は家康が畿内に滞在する際にはその接待役として、柳原淳光や浅野長政、細川幽斎たちと共に家康の下に赴き、そのたびに夕食に相伴し、将棋や囲碁などを行っている。禪高自身が秀吉に帯同して名護屋に向いていることもあったようで、家康の動向と合わせてみると、必ずしも家康の上洛に併せて毎回対面しているわけではないと思われるが、秀次事件を契機に家康が伏見に常駐するようになる文禄四年頃まで禪高が家康と対面している史料を定期的に確認することが出来る。

「家譜」によると禪高は天正十四年に家康と秀吉に命じられて対面を果たし、この時に家康と縁が繋がれたとしている。しかし実際は禪高が家康

と関係を深めたのは文禄二年から四年にかけてであろうと思われる。慶長二年（一五九七）には家康が伏見へ織田有楽斎や浅野長政と共に禪高を招ねており（¹⁴）、禪高が家康との関係が近くなっている史料と見ることも出来よう。この数年間の交流が後に関ヶ原の合戦で東軍に味方するきっかけになっていったのであらうと思われる。

おわりに

豊臣秀吉が死去し壬辰戦争（文禄・慶長の役）が終了すると、時勢は徳川家康主導へと流れていった。山名禪高の動向は必ずしもはっきりはしていないが、慶長五年（一六〇〇）に禪高は徳川家康の上杉討伐に参加しており、その後、石田三成が徳川討伐の兵を挙げて、関ヶ原合戦が起こると、亀井茲矩の軍勢と共に戦いに参加したという（¹⁵）。その後、同年十月には家康に命じられて西軍方に属した赤松広英の居城である但馬国の竹田城へ派遣され、城地の請け取りを行った。この功績により禪高は翌六年に七美郡に六七〇〇石を与

えられ、再び所領を得るに至った。そして、寛永三年（一六二六）十月七日、禪高は七十九年の生涯を閉じた。

豊臣期の禪高は天正十四年（一五八六）以降、文化人として再び中央権力に出仕するようになり、その中で徳川家康と通じることとなった。家康の接待役になるということは、禪高自身、連歌や和歌だけでなく武家儀礼の先例や故実に通じており、上級武士としての教養や知識を持ち合わせていたのであらう。それは、江戸時代になり大名ではなかったが、村岡山名家が表高家並寄合と交代寄合表御礼衆となっていることから、鎌倉時代以前から続く名族として武家儀礼の先例や故実の知識を村岡山名家が継承していたことがわかる。

一般的に山名禪高には領国を失った「亡国の将」、「弱将」（¹⁶）や、朽木卜斎（元綱）をめぐる徳川家康とのやりとりで代表されるように、厚かましい粗忽者（麁相人）といった（¹⁷）、マイナスイメージの評価が強い。しかし、禪高が豊臣期に文化人として豊臣政権下を上手く立ち回りつつ、家康

との縁を上手く利用して、結果的に江戸時代に家をつなげた点は評価すべきであろう。一度所領を失った山名氏だが、再び家を復興させ、江戸時代に領主として一族を復興させた山名禪高は、山名氏一族を考える上で重要な人物といえよう。特にこれまであまり注目されてこなかった後半生を改めて検討していく必要があることを指摘して本稿のまとめとしたい。

- (1) 山名禪高は天正九年に出家をして「禪高」と名乗っているとされるため、本稿では「禪高」で統一した。
- (2) 小坂博之『山名豊国』（一九七三年、法雲寺）
- (3) 小坂前掲書
- (4) 「山名家譜」八卷（東京大学史料編纂所所蔵）。以下、便宜上、「家譜」とする。
- (5) 「言経卿記」天正十四年正月五日、五月廿五日、六月一日（『大日本古記録』、以下同じ）
- (6) 「家譜」八卷
- (7) 「豊臣秀吉書状（龍野神社旧蔵文書）」（兵庫県立博物館『特別展ひょうごと秀吉』展覧会図録、二〇一七年十月）

- (8) 「家譜」八卷
- (9) 「吉川経家書状」（『大日本古文書』吉川家文書別集「石見吉川家文書」一四三号）
- (10) 但馬国の国人、垣屋豊統は羽柴秀吉に属した後に、宮部継潤の麾下に付けられている（高畑垣屋文書）。鳥取城攻めの後に秀吉が宮部継潤に宛てた捷書には禪高ら山名氏処遇について継潤の意思を尊重する文言が見られることから（上田家文書）、禪高もこの時に宮部の麾下に編入を求められ、それを拒否した可能性も考えられる。

- (11) 「言経卿記」天正十四年正月五日条
- (12) 「言経卿記」閏九月二十一日
- (13) 「言経卿記」
- (14) 「日用集」慶長二年正月十三日
- (15) 「家譜」八卷
- (16) 小坂前掲書
- (17) 「岩淵夜話集」

いしいのぶひろ
石井伸宏氏のプロフィール

鳥取市歴史博物館 主任（学芸員）

1981年神奈川県生まれ。

國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。専門分野は日本中世史。

2009年6月から鳥取市歴史博物館で学芸員として勤務。

第27回山名会総会について（予告）

新型コロナウイルス感染症の流行によって社会の動きが停滞したこの3年。我々にとって、この3年は次に繋げる「充電期間」であったかと思ひ直して、今後の活動に励みたいと思います。

コロナ後初の山名会総会は、武家政権の原点である鎌倉を訪れて、源氏縁の史跡を巡り、山名氏との関わりについて理解を深めたいと思います。



屋食場所の「樫亭」玄関

期日…令和5年11月29日（水）～30日（木）平日開催になります。

集合…11/29午前11時 鎌倉・鶴岡八幡宮前

第1日目は、

・鎌倉の奥座敷「樫亭」にて昼食。鎌倉山から臨む相模湾の展望や広い庭園をお楽しみください。

・鎌倉の定番、鎌倉大仏。
・護良親王をまつる鎌倉宮正式参拝。

・北條執権邸地跡に建つ円頓宝戒寺の参拝。

・頼朝公墓所、鶴岡八幡宮自由参拝や周辺散策。

・宿泊は翌日にそなえて、町田市の万葉の湯。

第2日目は、

・織田豊臣の貴重な史料を展示する泰巖歴史美術館。

・JAXA宇宙研究所で少し先の未来のことを勉強。

・相模原市民会館で歴史講演と年次総会を実施。

解散…11/30午後3時頃 JR相模原駅

参加費…3万5千円、諸般高騰によりご理解ください。

※正式なご案内は、後日差し上げます。参加の検討よろしく願います。

会誌『山名』第8号

令和5年8月 発行

編集・発行 全国山名氏一族会

兵庫県美方郡香美町村岡区

村岡2365 山名氏史料館内

（事務局 吉川廣隆）

表紙裏
空白ページ

